自叙

内訌の起伏は勢のみ人物の有無と何等の交渉かあらん若し内訌の起伏を以て人物の有無に關するものありとせば世界萬國古往今來竟に一人の人物なきあり天下安んぞ此理あらんや

曹洞宗連年の内訌容易に平定の佳

運に至らざるを見て局外管見の徒
動もすれば冷然之を評して高僧ぁ
きの致す所まりと云ふものあり是
れ豈に内訌の起伏を以て直ちに人
物の有無をトするの徒にあらずや
其言の取るに足らざる固より論ず
るなき而已
居士の斯書を著はす其意局外管見

の徒をして曹洞宗内訌の起伏は毫
末も高僧の有無と交渉を有せざる
ことを知らしめ併せて因縁を曹洞
宗に有するものをして幾多高僧の
力能く曹洞宗今日の旺盛を致した
ることを知らしむるに在り斯書を
讀むもの冀くは此意を忘失する勿
れ

明治廿六年十一月下浣芝山の小寓に於て

頑石點頭居士謹識

例言

一本書の稿を脱したるは實に本年十月三十日に在り故に同日以後に於ける高僧各位の異動は本書の知る所にあらず

一本書の原稿を印刷に付して後數日を經て内務大臣の訓令曹洞宗事務取扱に下り於是乎畔上總持寺貫首は退隠申告書を受領し石川、大徹、渡邊(寂潭)、在田の諸師亦宗科の問ふ所と爲りたり然れども此事たる制度上の紛爭に起因したるものにして常事犯的の宗規違犯者と一例に看過し去るが如きは頗る酷に失するものと謂はざるべからず人或は曰はん常事犯的と國事犯的とを論せず苟も宗制宗規に違犯して宗科の問ふ所と爲りたる以上は即ち是れ宗門の罪人のみ豈に之を高僧碩德と稱すべけんやと然り苟も宗制宗規に違犯して既に宗科の問ふ所と爲りたる以上は宗門の罪人たるには相違なからら

ん而かも大井憲太郎、河野廣中の輩は嘗て國事に坐して久しく囹圄に繋がれたりと雖も尚一個の名士たることを失せず之を要するに國事犯的の宗規違犯は其手段宜しきを得ざりしによりて適ま宗科の問ふ所と爲りたるのみ其罪を惡むと同時に其人を併せ惡み以て之を高僧碩德にあらずと謂ふが如きは局量に失するの徒のみ光風霽月の曹洞宗僧侶中に於て此の如き小膽局量の徒なきは本書の嘗つて保證する所なり

一本書の著者は固より曹洞宗僧侶にあらざるを以て曹洞宗に於ける分離、非分離、中立等の各派に對し固より何等の關係をも有せず又何等の意見をも有せず故に本書は直に高僧各位の本領に向つて公明正大に月旦を加へ敢て其他を言はず若夫れ某師は分離派に對して云々の關係を有し某師は非分離派に在りて云々の地位に立てりと

云ふ者亦其事實を直寫するに止るのみ分離、非分離、中立等の閑名目は本書の固より知らざる所なり

一九十一高僧月旦の材料即ち其現在住職の寺名、學歷、事業、賞罰、地位、長處短處、性行、主義及び特殊の行爲等に關しては非常の苦心を須ひて調査したるを以て大體に於て甚しき誤謬なきは本書の自から信じて疑はざる處なりと雖も要するに其三分の一は著者の記憶に取りて三分の二は廣く九十一高僧を知るものに就て調査したるものなれは之を曹洞宗務局に問ひ又は直接九十一高僧に就て調査するに比して多少の誤謬を免れざるは本書の殊に遺憾とする處なり故に苟も誤謬あるを發見せば直ちに其事由を具して通告あらんことを望む

一本書は兩本山貫首及び瀧谷永平寺前貫首を除くの外高僧各位月旦

の順序は『いろは』順に據りて之を定む但秦憑芳師を本書の紙尾に付するの已を得ざる所以は師に對する月旦の材料漸く印刷終りを告げんとするの際に接手したるを以てなり

一岡、高木、高閑者、寶山、翼、長野、中村、山本、松本、福永、孤峰、滿岡、信叟、杉山等の各高僧を始め其他十數名の高僧をも本書に收めて月旦を加へんと欲し其材料を蒐集せしめしも印刷終りを告ぐるに至るまで接手せず故に已むなく第二輯に收むることゝせり諸師幸に諒せよ

一殆んど二萬に近からんとする曹洞宗僧侶の群より僅々九十一高僧を拔く本書の固より滿足する能はざる所なり故に近日の中更に本書の第二篇を發行し以て本書の不備を補はんとす本書に洩れたるの故を以て之れを高僧碩德にあらずと謂ふは非なり本書の著者豈に天眼通を具するものならんや

四

目次

森田悟由　畔上楳仙　瀧谷琢宗
石川素童　伊藤雲宗　服部元良　原宣明
林道圓　長谷寶宗　西有穆山　西野石梁
西川象山　星見天海　戸澤春堂　德山了古
森玉仙　陸鉞巖　大辻是山　折居香輪
大溪泰量　織田雪巖　鴻春倪　鴻春爾
温嶽耕堂　大森惠範　大佛輔敎　渡邊實雄
渡邊寂潭　渡邊禪戒　輕部彥勇　吉川義道
鷹林冷生　高岡白鳳　大徹圓洲　田村大機
嶽尾泰忍　谷垣省拙　瀧田融智　武澤法雲
高田道見　筒川方外　南木國定　成川百祐

一

村上泰音　上野瓶城
宇野默音　上田祥山
上中相音　山縣天機
古田梵仙　藤原良宗
近藤琢賢　江西芳洲
安達達淳　麻蒔舌溪
有澤香巷　阿部太環
佐藤大忍　佐藤實英
北野吾有　木田韜光
三井海雲　水島洞仙
水野道秀　水野禪法
弘津說三　樋口道義

上田法能　宇野玄機
仁義道　久我篤立
天髭町元　福山默童
呑空　古知常　小松万宗
江崎接航　在田彦龍
青島興庵　阿川斷泥
足立普明　新井石禪
北野元峰　北山紹山
菊池大仙　木下吟龍
三輪泰然　水野良英
紫安石雲　日置默仙
須和文孝　秦瑟芳

頑石點頭居士　著

森田悟由禪師（大本山永平寺貫首）

混濁の世に處して毫も混濁の氣に汚がされず物外に超然として高く地歩を占む我が大本山永平寺貫首森田悟由禪師の如きは實に當代の偉人と謂つべき歟

故勅賜弘濟慈德圓師（大本山總持寺前貫首栴崖奕堂大和尙）の門下多士濟々たり而して森田悟由禪師特り七本槍の隨一を以て稱せらるる以て其行解の尋常ならざりしを見るべし今や故禪師亡し而して第二の故禪師として彷彿の間故禪師の風采を親ふに足るべきものは故禪師門下の龍象中特り森田悟由禪師あるのみ禪師安んぞ自重せざるべけん

や、

明治二十五年三月十九日能山分離の紛擾起るや禪師は永平寺に貫首として實に其難局に當れり若し禪師をして尋常一樣の凡僧たらしめんか靖難の畫策に齷齪して維れ日も足らざるべし而かも事務取扱を兼ねて宗務に鞅掌し其暇餘を以て碧巖集を南品の東海寺に提唱す胸中綽々の餘裕を存するにあらずんば安んぞ此の如きを得んや

禪師戒行高潔而して定力殊に高く兼ねて宗門の歷史に通曉す故を以て嘗て大本山總持寺僧堂に西堂として龍象淘冶の任を全ふし又嘗て法式改正委員として法式改正の事業を助く今や大本山永平寺に貫首として尙紛擾の難局に當れりと雖も宗運を勃興せしむるの念未だ嘗て一日も懷を去らず故に公務の餘暇或は門下の龍象を接得し或は地方に赴化す謂ふこと勿れ禪師に赫々の偉業あるを聞かずと僧家の事

業豈に敎學の振起に過ぐるものあらんや彼の功名の志勃如として自から抑ゆる能はず迸りて種々の俗事を爲す一流の俗輩は之を激賞して希世の偉業と爲すと雖も之を敎學の振起に比す固より日を同ふして論ずべきにあらず居士は於是乎益々禪師の禪師たる所以に敬服せずんばあらざるなり嗚呼禪師は實に當代の偉人なる哉

畔上楳仙禪師（大本山總持寺貫首）

古稀に近きの頽齡を以て嘗て一日も寧處せず出でゝは則ち宗門の政務を總攬し入つては則ち敎學の伸張に淬勵す謂ゆる天下の憂に先ちて憂ひ天下の樂に後れて樂む者居士我が大本山總持寺貫首勅賜法雲普益禪師畔上楳仙老和尙に於て乎始めて之を見る

禪師は東都駒込吉祥寺學寮の出身にして後月潭和尙に湘南の海藏寺に參したる者なり故に其學植の深遠にして而して宗乘の自在なるこ

と宗門諸老宿中能く及ぶ者少し之に加ふるに戒行の清きこと雪の如く徳望の隆きこと山の如きを以てす是れ最乗寺独住第一世として久しく瑞を開左の佛法に握り尋で官撰に依り遂に大本山總持寺貫首の地位に進みたる所以なり

故弘濟慈徳禪師の俄然化を羽北に戢むるや曹洞宗務局は末派寺院に令し宗規に據りて大本山總持寺の後董貫首を公選せしむ事故ありて曹洞宗務局自から當選者を定むること能はず於是乎其選定を太政官に請ふ太政官乃ち禪師を拔擢して之に大本山總持寺住職を命ず此時に當り禪師外出して寺門に在らず役者某代りて其辭令を受く既にして禪師寺門に歸り之を見て驚ひて曰く山野の徳固より大本山の貫首たるに堪へず而して此の如き辭令之を山野に告げずして擅に受く何ぞ亡狀の太甚しきやと乃ち辭令を太政官に奉還し書を上りて固辭す

ること再三然れども大勢既に定まる區々の私情を以て之を回へすべきにあらざれば禪師は遂に已を得ずして之を受く其思想の高潔にして胸襟一點の塵滓なきこと以て見るべきなり

抑も曹洞宗に緇衣を着くる者何ぞ限らん然れども戒定慧の三學を具備し綿々密々能く祖風を欽守して範を一世に垂るゝ者に至りては禪師實に宗門に獨歩すると謂ふも不可なし人動もすれば禪師が能山の分離獨立を宣表して內務大臣より曹洞宗管長の棄職を解かれたるを以て白璧の微瑕なりと云ふと雖も是れ蓋し禪師を知らざる者の妄說のみ居士を以て之を見れば棄職解除の事決して禪師の清徳を累はすに足らざるなり縱へ此一事說者の言の如く禪師の清徳を累はす者となすも禪師が嘗て一世の心血を濺ぎて能山に僧堂を新設したる此未曾有の殊勳は萬世泯滅すべきにあらず然れば則ち此を以て彼を償ふ

も亦以て巨多の贏餘あり鴻鵠の志豈に燕雀の知る所ならんや嗚呼禪師や實に祖門の英雄と謂つべきなり

瀧谷琢宗禪師（大本山永平寺前貫首）

大本山永平寺前貫首勅賜眞晃斷際禪師瀧谷琢宗老和尙を以て潛かに王安石に比するの徒あり其言に曰く彼れ天稟の敏慧を以て一世を睥睨し猥りに新法を布き末派寺院を虐げて自から利す佛祖の罪人と謂つべしと佛祖の罪人か佛祖の罪人にあらざるか居士は之を知らず然れども勝敗豈に英雄を議すべき恰當の標準ならんや

勝敗既に英雄を議すべき恰當の標準にあらずとせば勝敗の外別に英雄を議すべき恰當の標準なからざるを得ず居士を以て之を見れば謂ゆる英雄を議すべき恰當の標準なるものは英雄其物の勝敗にあらずして即ち其心事に在り果して其心事に在りとせんか禪師を以て王安

石一輩の徒に比す酷と云はざるを得んや

維新草創の際禪師が故青蔭禪師と〻もに日夜苦心して遂に兩山併立制度の基礎を固めたるが如き事舊聞に屬するを以て敢て玆に言はずして彼の明治十二年に於ける兩山盟約の起草明治十八年に於ける曹洞宗々制の編纂の如き禪師に於て一種の功勳たるに相違なきも當時別に責任者の在るあれば又敢て玆に言はず獨り彼の護法會を設立し三十萬圓の基本財産を新設したる一事是れ實に禪師半生の大勳偉蹟にして而して毀譽の係る所亦實に此に存せり有志會なるもの〻明治廿二年に起る其遠因近因果して何れに在りしや居士は之を知らず然れども當時禪師が護法會金を處理するの敏速なる恰も電光の閃めくが如きものありて遂に有志者に勃興の機會を與へしにあらざるか之を要するに有志會なるもの〻勃興の原因各種ありしと雖も護法會

金に對するの疑團其第一に位しありしや疑ひなし然れども有志會の此疑團一先氷解して明治廿三年十二月同會は遂に解散し禪師も亦等で永平寺貫首の榮職を退きたれば此一事居士は未だ容易に其勝敗を明言すること能はず若し強て其勝敗を言はんか謂ゆる護法會の一擧は禪師自から敗を取りたるにあらず有志會なる一團禪師をして自から敗を取るの已むを得ざるに至らしめたるなり有志會なるものをして勃興せしめざること三年而して禪師をして拮据其處理に從事せしめたりしならんには基本財產の成立或は保すべかりしならん然れども平松六十兩銀行に對する預金一條に就ては禪師は德義上無論其責を辭することを得ず久次米銀行の如き今日未だ其前途を豫言する能はざるも同行にして若し異日倒產の不幸に遭遇するあらんか之に對する預金の一條禪師は亦德義上其責を辭するを得ず禪師の苦心茲に

至りて一層深しと謂ふべし禪師年齒漸く五十七八決して額齒と謂ふべからず而かも跡を韜みて城南麻布の富士見街に在り居士潛かに之を「エルバ」島に於ける「ナポレオン、ボナパート」に比す中らずと雖も蓋し遠からざらんか

之を要するに禪師は駒込學寮の出身にして奕堂禪師七本槍の一たり其學其膽固より尋常老宿の企て及ぶ所にあらず況んや經綸は其長處なるをや前半生の事業得失相半ばすと雖も倘後半生の在るあり英雄の草廬を出づる果して何の時ぞ秋風英雄を吹老ふ禪師の感掬するに餘りあり

石川素童師（近江國犬上部彦根清涼寺住職）

勝敗兵家事不期含恥忍垢是男兒江東子弟多才俊捲土重來未可知と是れ豈に多恨多感の杜鵑川が項王を烏江の祠に吊するの詩にあらずや

能山分離の一擧勝敗の數未だ定まらざれば師を以て項王に比するが如きは恰も師に不祥の惡識を與ふるの感ありて居士の甚だ快しとせざる所否居士は如何なる事業と雖も師が中道にして自から廢するが如きことなきを確信するが故に居士が師に贈るに固より不祥の惡識を以てするが如き惡意なきことは居士自から敢て分疏するを要せざるなり至竟居士が師を以て項王に比したるは師が寧毅果斷の質堅忍不拔の志の能く項王と相似たるものあるを以てなり

然り師は實に寧毅果斷の質と堅忍不拔の志とを併有せり此故に如何なる事業と雖も成れば必ず全力を守成に盡くし成らざれば苟くも成るに至るまでは斃るゝも已まず之を彼の朝に一事を企て夕に失敗に懲りて其跡を韜晦する怯懦の漢に比す固より同日の論にあらざるなり

師は故長森良範和尙の門下に於て嘗て出藍の譽を得たる人なり而して其經綸の志に至りては全く良範和尙の衣鉢を繼承したりと云ふも可なり之を聞く良範和尙の大本山永平寺に對する事業は師の補弼に出づるもの多きに居ると或は然らん能山分離の一擧に至りては居士未だ可否果して孰若なるやを知らず而かも然諾を重んじ一身を賭して之に當る俠骨稜々たるにあらずんば安んぞ此の如きを得んや宜なり矣畔上總持寺貫首の深く之を信任するや棺を蓋ふて而して後論定まる生前の毀譽師に於て何か有らんや

居士は更に師に敬服するものあり何ぞや師が忍耐の力頗る强大なることと是れなり人馬を以て師を呼べば師は乃ち馬を以て之に應へ牛を以て師を呼べば師は乃ち牛を以て之に應へ唯々諾々毫も之と爭はず而して一定不可動的の識見銀山鐵壁攀づべからざるの概あり謂ゆる

山高ふして頂を露はさゞる者非歟故を以て人其凡耶聖耶を測るもの
なし嗚呼是れ眞に師の師たる所以なる歟

伊藤雲宗師（越後國中蒲原郡瀧谷慈光寺住職）

其容貌は秀麗其擧止は都雅其風采は優尚一見人をして天台僧にあらざれば則ち公卿華族の出家ならんかと疑はしむるものは瀧谷永平寺前貫首幕賓中の尤物伊藤雲宗師なりとす

師は天資磊落事物に齟齬せず故に或者は師を以て寛仁大度と謂ゆる「ノンキ」なりとす寛仁大度と謂ゆる「ノンキ」とは似て非なるものなれば固より一樣に看做すべきものにあらずと雖も兎に角師が逆境に處して甚だ悲まず順境に處して甚だ喜ばざるは天資「ノンキ」なる一證として見るべき歟

師又風雅を愛し書畫骨董等の鑑定に巧みに兼ねて本職なる說敎演說

を能くす然れども是を以て師が第一の長處となすは認れり師が第一の長處は實に吏才に在り

瀧谷永平寺前貫首の曾て宗門を經綸するに方りてや師は實に徵されて其幕僚たりしなり當時師は曹洞宗務局執事の顯職を以て政務に敏活なる瀧谷永平寺前貫首を輔弼し厚く其信任を擔ひて施設する多しと雖然れども雨硬相擊つ如何んぞ一傷なきを得んや有志會の解散に臨み師が骸骨を乞ふて故山に歸臥するに至りしは世人之を責を引ひて辭したるやに風說せしも居士は之を以て敏活と敏活と衝突せし所の結果と信ぜざるを得ず

今日に於ける師と瀧谷永平寺前貫首との關係は居士之を知るに由なし然れども師が功名心の未だ灰燼に歸せざるは師が越山の顧問として現時尙東京に在るに就て證することを得べし若し年齒を以てすれ

ば師は固より石川師に及ばず而かも吏才に至りては孰れか伯孰れか仲未だ容易に判すべからざるなり惜ひかな風雲未だ際會の期に至らず驥足未だ伸ぶるに由なき所以歟

服部元艮師（下總國東葛飾郡市川町總寧寺住職）

現今宗門の元老として末派寺院の推重を受けつゝあるは大辻、在田、安達、西有、南木、成川等の諸老宿なりとす、然れども元老中の元老として聲望最も隆なるは唯一人の服部元良師あるのみ

師は何故に元老中の元老なるか曰く師が自坊なる總寧寺は幕府時代に於ける關三刹の一にして下野の大中寺等と、もに德川幕府の命に據りて元和以來宗門を統掌し來りし衙門たり故を以て師の法統を繼承して茲に臨むや銳意宗政を執り他の二刹と、もに力を宗運の進歩に盡したることは少しく維新以前に於ける宗門の事情を知るもの、

齊しく首肯する處なり德川氏大政を奉還し萬機親裁に決するに及びて關三刹の政權亦解く於是乎師は啓されて宗門の樞機に參し爾來二十有餘年或は職を監院に奉じ或は管長代理を勤め老ひて益々壯なり謂つべし宗門の馬伏波と願ふに維新以後に於ける師の功勳は何人も能く記憶する所之に加ふに維新以前に於ける宗政統掌の勳業を以てす師が元老中の元老として特に宗門の推重を受くる所以豈に偶然ならんや

居士は特に師に向つて感謝を捧げざるべからざるものあり何ぞや大政維新百事草創の際に當りて排佛毀釋の氣焰非常に盛なりし此際に臨み師若し他の二刹といもに力を協せて宗門を匡救する徃りせば今日の吾宗は夫れ頽廢して見るに堪へざらんか而かも一髮千鈞を牽くの危機に臨み憂宗の赤誠能く宗門を陸沈に濟ふ誰か其志を多しとし

其勤を偉なりとして感謝を捧げざらん

師は温厚篤實の君子にして定力學力俱に高く衆ねて吏才に富む其一事を處するや必ず結果の結果を考へ果して確乎不拔の見込立つにあらざるよりは容易に決行することなし其用意の周到なる數多の當路者中罕れに見る所今や井上内務大臣の信任を荷ふて星見天海師といもに事務取扱たり多年勲々たる宗門の雲霧は願ふに此治世の能臣によりて掃はれんか居士刮目して待つ

原宣明師（丹波國氷上郡御油村圓通寺住職）

楚々たる丰姿剛々たる風采一見人をして貴公子にあらざるかを疑はしむ而して之に接すること稍久ふして始めて其心鍛の如く其膓石の如きを見る謂ゆる其外を處女にし其内を脱兎にする者非耶太史公嘗て張子房を疑ふ以爲らく其容貌必ず魁梧奇偉ならんと而して仔細に其人

と爲りを知るに及んで益々子房の子房たる所以に敬服せりと云ふ居士太史公にあらざるも亦師に對して此感なきを得ず

均しく大學林の卒業生たり而して一は益々進み一は益々退く畢竟何の故ぞ願ふに其原因天性の利鈍に在ること勿論なりと雖も素養足らざるの一事又其一大原因たらずんばあらず師が大學林出身者六百有餘名の中に在りて特に名聲噴々たる所以は亦實に之れが爲めのみ

或人師を評して曰く師が今日の學問を以て之を大學林三年の修學より得來れるものと爲すは未だ師を知らざるものなり師が今日の學問は實に之れを大學林入學以前に得了れりと夫れ或は然らんか師が少小にして但馬の碩儒池田氏の塾に在るや常に出藍の譽れを博したりき漢學は師が第一の長處此力を應用し或は知識に從ひ或は經卷に從ひ十年倦まず血涙を螢窓雪案に濺ぐ願ふに彼の大學林三年在學の如

きは畢竟出世の權方便として宗門の秩序を履みたるに過ぎざるなり」

今や師は前住日置默仙師の付囑を受けて圓通の後席を董し某禪客に輔佐せしめ大衆を督して只管打座の王三昧に住し其擧措大に剛々たる輕薄才子の舌頭佛法を簸弄するに似ず因幡に陸鍼巖師あり丹後に宇野玄機師あり之に師を併せて居士は今より之を山陰の三傑と稱せんとす而して本山貫首の寶冠十年二十年の後未だ必らずしも師等三傑の頭上に墜ち來らずんばあらず師よ宗門の爲め自愛せよ

林道圓師（伊豫國和氣郡西林寺住職）

林道圓師の伊豫に據りて四國の敎權を握りつゝあるは猶戰國の時長曾我部元親氏の土佐に據りて海南の樞機を掌りしが如き歟豊太閤の威武を以てして容易に元親氏を屈する能はざりしは地の利之をして然らしめしには相違なかるべしと雖も而かも元親氏の伎倆能く豊太閤の威武に抗するに堪へたるものあるにあらずんば安んぞ能く此の如くなるとを得んや借問す吾宗の長曾我部元親たるもの果して如何」師は大學林出身の一學士にして嘗て學監の榮職を大學林に奉じたることあり既にして尊艦を秋風に憶ふや乃ち學監の印綬を拋ちて故山に歸臥し爾來演說に說敎に東走西馳概ね虛日なし其全幅の精神を傾けて布敎に盡すもの少壯高僧中罕れに見る所宜なり矣四國の宗徒師を仰ひて迷津の慈航と爲すや師にして倦む所なく十年二十年一意布敎に從事せば彼の山陰の三傑等といゝもに早晩本山貫首の寶冠其頭上に墜ち來らんこと必せり師たるもの益々奮はざるべからず

政治に於て地方分權の必要あると同時に宗敎に於ても亦地方分權の必要なからざるを得ず殊に布敎の如きに至りては識者誰か地方分權の必要を感せざらん而して之を實行するものゝ寥々たるは宗門の爲

め尤も憂ふべきものなりとす師の如き口地方分權の必要を云はず而して身地方分權の必要を行ひ松山佛敎靑年會を創設し法雷雜誌を發行して孜々布敎に勉む宗門の僧徒苟も悉く師の志を以て志と爲さば新豐の一曲敢て振はざるを憂へず乃ち師や曾に海南に據りて宗門の重きを爲すのみならず亦實に宗門に對して地方分權的布敎の範を垂るゝものなり師の殊勳安んぞ沒すべけんや

長谷賢宗師（陸前國名取郡千貫村長谷寺住職）

長谷賢宗師が詩に巧なるを見て直ちに師を詩僧なりと速了するものあり師豈に詩僧ならんや願ふに唯詩に巧なるのみ

詩は師に於て畢竟緖餘の業のみ而かも緖餘の業に巧なるを以て之を詩僧と呼ぶべくんば僧侶にして若し骨董古書畫の鑑定に精なるものを呼んで骨董僧と云ふも可なるか居士未だ此理を發見する能はず古

人云く詩は志なり志を言ふと又云く詩は三百篇一言以て之を蓋ふ曰く思邪無しと天地万物皆詩のみ苟も心に觸るゝ所あり發して言と成る何物か詩ならざらん鴉のカア〳〵も詩なり雀のチゥ〳〵も詩なり果して然らば吾人日々の言語一として詩ならざるはなし唯師や天性の錦心繡腸咳唾逈りて適〻珠璣と成るのみ其實は吾人日々の言語と毫も異なるなし且つ宋の蘇長公彼れ豈に絶代の大詩人なるにあらずや而かも嘗て云ふ人生字を知るは憂患の始と而して遂に詩に因りて罪を得乃ち何ぞ特り師が詩に巧なるを妨げんや吾愛風流狂杜牧能談風月能談兵要するに師も亦東坡攀川一流の人宜なり矣能く風月を談じ能く時務を談ずるを抑も言ふ者罪なく聽く者以て戒むるに足る詩の用果して此の如くなりとせば居士は益々望を師に屬せざるを得ず現時宗門の紛々紜々僧

問す何人か果して之を根柢より救療するの伎倆を有する者此際師の如き殊に詩に巧みなるものあり純潔無垢なる詩に因りて佛祖の聖諭を齎し來らば狂瀾を將に倒れんとするに支ふ敢て難きにあらざるなり師何ぞ晉發して此大任に當らざる

西有穆山師（遠江國周智郡久努西村可睡齋前住職）

有安老人西有穆山師の西駿に蟠踞するは猶不二峰の東海に屹立するが如きか彼れは國家の重鎭たり此れは宗門の柱石たり國家の重鎭と宗門の柱石と雙美雙絕相掩ひ相映ず亦日東の偉觀なり

師は奥北の人なり若冠にして南遊し月潭和尙に湘南の海藏寺に參ヒ函丈に追隨して造詣する所頗る多し時人師を稱して月潭門下の白眉と云ふ尋で西遊して三藏を京師に修め宗旨を故勅賜弘濟慈德禪師に問ふ其學成りて能化の任に當るや開堂演法盛んに徒を領し衆を匡す

今の宗門に於て嶄然頭角を顯はすものは概ね師の門生にあらざるはなし師が宗門の柱石として厚く末派寺院の崇敬を受くるも決して偶然にあらざるなり

若し師の事業を說き功勳を擧げ來らば百紙を涅するも尙足らざるべし實に師は宗門の元老として推重すべきのみならず亦實に宗門の元勳として特に崇敬を加ふべきの人たり

明治の初年師が北門開敎の志を齎らして北海道に入るや當時の開拓使長官は實に今の遞信大臣黑田伯爵にてありし伯爵は薩南の武人文武の兩道に於ては一として該通せざる所なきも宗敎のことに至りては固より其知る所にあらず殊に盛んに排佛論を唱へし薩人如何んぞ佛敎を北海道に宣布することを快しとせんや面かも師が北門開敎の赤誠は遂に此薩摩氣質の一轍官人を說破し快よく其許諾を受けて北

門開教の素願を果すことを得たり是れ職として師が日月を貫くの赤誠に因るべしと雖も其宏才博識能く伯爵を感動せしめたるにあらずんば何を以てか容易に素願を達することを得んや然りと雖も是れ僅かに師が事業の一端を挙げたるに過ぎざるのみ顧ふに此の如きの事業は師に在りて竹頭木屑たり豈に敢て特筆大書するに足らんや

明治十五六年の交師は其門生市川東崖師を携へ欧米を漫遊し宗教を視察せんと欲するの念勃々たり於是乎書を管長に致して其許可を望みたれども師が年齢古稀に近きを以て風土の同じからざる途中萬一の変あらんことを恐れて容易に之を許さず既にして市川東崖師逝き事情又其遠遊を許さゝるものありて遂に海外観光の志を絶つに至れり師の慨果して如何ぞや

師天眞爛熳苟も境遇と相抗争することなし怒るべきに逢へば則ち怒り喜ぶべきに逢へば則ち喜び大用現前規則を存せずして而かも境遇一たび去れば風收まり波靜まり恰も秋空洗ふが如きの概あり謂ゆる應無所住而生其心なる者非耶而して其操行の純潔なること宗内推して第一とす曹洞の一宗此巨大なる柱石に倚りて萬代不易なる所以

西野石梁師（山城國久世郡宇治町興聖寺住職）

其年齢を問へば僅かに四十四而かも高祖初開の道場たる宇水の興聖寺に住して盛んに化門を張る我が西野石梁師の如きは乃父故勅賜絶學天眞禪師久我環溪老和尚と乃兄故不二門眉栢師との餘澤に由ると雖も亦師に非凡の力あるにあらずんば何を以てか今日此好地位を占むることを得んや

禪定は師の長處なり而して說教も亦師の長處なり故を以て師の嘗て尾州に在るや內鞏輔を開ひて學者を淘冶すると同時に外赴化を勤め

て度生の業に從ひ名聲頗る嘖々たり此時に當りて其年齒未だ而立を超へざりし法嶼攝北に移り退藏の後席を董すに及び師の道光益々遒邁に輝き殆んど近畿佛法の覇を握らんとす尋で法幢を伯耆の退休寺に移し而して今や故不二門眉栢師の遺囑を受けて宇水の興聖寺に覩篆す然り而して門下に雲衲の輻湊すること實に近畿第一たり故に或人師を評して云く名門に好子弟を出す信なる哉と居士も亦此說に同情を表するものなり

師の雲衲を接得するや門庭峻嚴殆んど銀山鐵壁攀づべからざるの概あり而かも平素之を愛して恰も愛兒の如く遇するは尋常師家の遠く及ばざる處故を以て門下雲衲の師を畏敬すること嚴父の如く師に倚頼すること慈母の如し是れ年齒未だ五十に至らず而して遂に身は高祖初開の道場として宗門中尤も名譽ある寺門に住職し以て覇を近畿の佛法に握るに至りたる所以なるか故勅賜絕學天眞禪師にして若し知るあらば大寂定中の歡喜果して如何ぞ

桂の佛法は未だ其磨滅を恐るゝに足らざるなり

今や宗門分離非分離の接戰闘なり而して師特り超然として局外に中立し化度の業に是れ勉む滿身是れ道念而して絕へて功名心の其念を攪くものなし斯人あり而して洞上の宗旨遂に滅し去らざるなり何ぞ曾天桂の佛法のみならんや

西川象山師（三河國南設樂郡新城町永住寺住職）

現今各地方曹洞宗務支局に取締の職を奉ずるもの七十有餘名敢て鮮少なりとせず特り事理に明晰にして而して地方宗務に通曉するものに至りては居士先づ師を推して其第一流に置かざるを得ず

愛知縣第二號曹洞宗務支局管下（即ち三河國數郡）は全國七十餘支局に

通じて尤も難治の支局なりとす而かも師の事理に明晰にして而して地方宗務に通曉するや身取締として此難治の支局に臨むにも拘らず恰も汲黯の臥して縣政を治めしが如く最も容易に之を治めて一人の不平者をも生ぜしめず居士如何んぞ地方宗務を執るものゝ模範として斯人に推服せざらんや

世人皆稱す三河には嘗て八天狗なるものありと今日師の配下に於て尙八天狗の棲息しあるや否や居士に於て固より之を知るに由なきも兎に角三河國は德川氏の始めて呱々の聲を放ちたる處而して謂ゆる三百諸侯なるもの其多くは三河國出身なる所より見來れば三河人士の氣質今尙古えと異らざるものあらんか則ち三河僧侶の氣質亦其土氣に感ずる所深からずと謂ふべからず而かも能く之を治めて宗門中良二千石の稱あり師が果して如何なる人物なるかは此一事に就て斷

證することを得べし

明治二十二年の交有志會なるものゝ大阪に起るや師が憂宗の熱情自から抑えんと欲して抑ゆる能はず於是乎去つて同會の大會に臨みしことあり大會即ち師を推して議長に戴き十五の革弊條目を議決し委員東上して曹洞宗務局に請願する所あり而して機運の未だ熟するに至らざる同會の意思遂に貫徹するに至らず且師亦大に感ずる所あり遂に同會を退くの已むべからざるに至る時既に利らず居士乃ち安んぞ師を咎むることを爲んや

師天資快濶人に接するに毫も城府を設けず故に人其好漢たるを稱せざるものなし師の如きは地方取締中に於て實に多く獲易からざるの人物と謂ふべし

星見天海師（相模國足柄上郡關本村最乘寺住職）

謂ゆる知識なるもの多し謂ゆる碩徳なるもの多し而かも知識中の知識碩徳中の碩徳として宮に宗門上流の地位を占むるのみならず其鋒芒の犀利なる一見犯すべからざるの概ありて宛然古知識古高僧の風采を有するものを我が最乗寺住職星見天海師なりとす

師は奕堂門下七本槍の一にして其驍名嘗て諸叢林に隠れなかりし故を以て其定力の高きこと宗門無敵と謂つべし之に加ふるに道徳の堅固學問の該博を以てす左ればにや師の一斑を知るものは或は師を以て禪定家と爲すあり或は師を以て學者と爲すあり或は師を以て道徳家と爲すあり而かも師は此三者を兼ねて通せざる所なし豈に特り風采の堂々として古知識古高僧に相逼りたるのみならんや

師又詩を能くし兼ねて書を能くす其物に感じ縁に觸るゝや逝りて詩と成り興會乍ち至り筆を拈じ紙に向ふや毫端一揮雲躍り煙舞ふ故に

其詩に在りては之を地に擲てば聲金石の如く其書に在りては之を壁間に掲ぐれば龍躍り虎嘯くが如し故に唯師の詩と書とを見るものは師を以て詩人と爲し又書家と爲す然れども詩書は師に於て遊戯三昧の一たり之を以て師を品す群盲象を探ぐるの僻のみ

師の嘗て聖胎を北越に養ふや其志固より韜晦に在りし而かも桃李不言なれども下自から蹊を成し遠近の道俗景慕して恰も衆水の東海に歸し群星の北辰に拱するが如し而して越後天海の名迅雷の轟々たるが如く須臾にして宗の内外に達せり嗚呼亦盛ならずや

師今や井上内務大臣の信任を荷ひ服部元良師と丶もに宗歩艱難宗運危殆の時に際し事務取扱として末派寺院に臨めり昔し謝安の未だ山を出でざる人皆云ふ謝安出でずんば蒼生を奈何せんと謝安山を出づるに及びて却つて赫々の功業なし遂に人をして今蒼生却つて謝安を

奈何ともするなしと嘆せしめたりき山を出づるの謝安は此の如く山を出でざるの謝安に如かずと雖も山を出づるの師は居士斷じて山を出づるの謝安と一例に視るべからざるを信ず何となれば師が憂宗の道念に深き固より彼の清誕一流の謝安と日を同ふして語るべからざればなり嗚呼今日に於て宗門の命脈を握るものは唯師と服部元良翁とのみ斯人にして宗門の否運を挽回せずんば誰か將た能く此任に當るべきものぞ分離と非分離と孰れか是孰れか非固より居士等有髮漢の知る所にあらずと雖も井上內務大臣は斯人を公平無私の人なりとして信任し佛祖亦冥々の中より宗門を斯人に託し給ふ師たるもの固より感激して宗難靖定の事業に從はざるべからざるなり而して是れ又一種の佛事也

戸澤春堂師（越前國足羽郡福井市孝顯寺住職）

戸澤春堂師の大本山永平寺に於けるは猶大江廣元の鎌倉幕府に於けるが如き歟彼れは國家の典例に精通するの故を以て征夷大將軍源頼朝に事へ此れは宗門の古事に熟達するの故を以て貫首森田悟由禪師を輔く上下一千年而して社會を異にして其輔くる所以を一にす地下の廣元にして若し知るあらば亦應さに方外に一知己を得たるを喜ぶべし

鴻雪爪翁は風流溫藉の人今や遊戲三昧に住して東都虎門琴平の神祠に主たり而して其法嗣として嘗て法を翁に嗣ぐもの故勅賜圓應道鑑禪師靑蔭雪鴻老和尙あり故濟聽水師あり而して二師は皆既に化を他方に移す者特り生存して一方に割據し翁の法嗣たることを辱かしめざるものに至りては只師と鴻春倪師の二人あるのみ名門の子弟亦奇骨を具すと謂ふべし

師の長處は尤も宗乘に自在なるに在り而して傍ら說敎を能くするを以て其一たび法座に陞りて宗旨を宣說するや實に水晶盤中に玉を弄するが如きの概あり是を以て德望頗る高く四衆の師を景慕することは恰も赤子の慈母に於けるが如し師又詩を能くし兼ねて書に巧なり故に隨つて交遊の者頗る多し上流社會に信用厚き所以師資性老實にして頗る門生に篤し稍々自尊の風ありと雖も而かも敢て人に驕らず故に何人も師を好人物として推重せざるはなし

居士亦別に大に師に敬服すべきものあり之を聞く嘗て分離非分離の接戰方に闌なるや二十餘名の有志寺院東上して曹洞宗有志寺院集會所なるものを芝に設け日夜相會して靖難の方策を討論す一夕秘密會を其樓上に開く適ま一老僧あり寺院集會所の受付に來り袖中より一封の菓誼を出し之を受付に與へて云く公等宗門の爲め百里の山川を

遠しとせず來りて靖難の方策を議す芳志多しとすべしと厚く勞ふて樓階を攀ぢ閾を排して樓上に陞る此時に當りて秘密會議方に樓上の一室に闌なり理事牧田義學師之を見て大聲叱咤して云く咄何等の無禮ぞ敢て秘密會議の室を侵す若し速かに樓階を降り去らずんば吾れ亦應さに爲すべきありと這僧敢て怒らず滿面喜色を湖して去る安んぞ知らん是れ師が有志寺院の芳志を多しとして之を勞らはんが爲め特に自から訪ひ來りしものならんとは其牧田理事の誰何に逢ふて益々有志寺院の熱情に感じ却つて喜色を滿面に潮すに以て師の無我なるを證するに足る居士安んぞ師の無我に對して敬服せざらんや

德山了古師（越中國射水郡高瑞龍寺住職）

大本山總持寺開山勅賜弘德圓明國師の洪德を景慕し佛慈講を創設して國師の德風を遠邇に宣揚す我が德山了古師の如きは實に國師の慈

孫として毫も不可なきのみならず亦宗門の忠臣として大に推重を加ふべきなり

師は既往に於て如何なる境遇を閲し來りたる人なるか居士未だ之を悉すを得ずと雖も要するに師が半生の事業は全く布敎に在りしや疑なし其說敎に於ける宗門推して第一と爲す或人師を評して云く師が說敎に於けるは猶迦陵頻伽の聲に於けるが如きか迦陵頻伽は卵殼の中に在りて其聲衆鳥に勝ると聞く願ふに師の說敎亦母胎に在りて幾多諸高僧を壓倒したるならんかと言綺語に似たりと雖も以て師が說敎第一宗門の富貴那と稱せらるゝ所以を證して餘りあるべし之を要するに說敎が了古か了古が說敎か居士の凡眼遂に之を甄別する能はざるなり

霖玉仙師（肥前國長崎市皓臺寺住職）

嘗て有志會七總代の一人として宗門革弊の義旗を浪華に揚げ今や分離派の九州探題として遙かに九州の分離派を督す我が霖玉仙師の如きは實に宗門革弊の天使と謂つべき歟

兩本山分合の可否に關しては居士等無責任者の固より喙を容るべきものにあらざれば寧ろ默して已むの勝れたるに如かず兎に角明治二十二年以來有志會事件に兩本山分合事件に始終身命財を拋つて宗門の公事に奉ず其忠肝義膽誰か欽せざらんや

師は皓臺寺の前住職高木忍海師門下の尤物にして最も宗學に長じ兼て文才あり故に其平生徒を集めて宗旨を拈提するや圖を開き徵を顯はし殆んど天機を洩すが如きの概あり是を以て瓊浦の士人爭ふて師の講筵に列し時々參謁して益を請ふ者多し抑も皓臺寺は宗門有數の巨刹にして門地亦頗る高し而かも師は不惑に迨ばざるの年齒を以て

高木忍海師の後席を董し以て九州佛法の覇柄を握る乃ち師や曾に分離派の九州探題たるのみならず亦實に宗門の九州探題たり其任たる豈に輕からんや之を聞く長崎の地外敎の人心に浸潤すること他の四開港場に比して尤も其太甚しきを見ると夫れ或は然らん師にして若し皓臺寺に據り以て九州佛法の覇を握り以て外敎に對して折衝禦侮する所なくんば宗門西部の要塞は夫れ敢に蹂躙せられんか師の責亦偉なりと謂つべし

師天性頗る不潔を忌む故を以て眼苟も不潔なるものを見んか必ず之を清めざれば已まず是れ師が常に宗門の時弊に對して慷慨措く能はざる所以ならんか

師又頗る道誼に厚し其道友日置默仙師の法幢を可睡齋に移すや喜色滿面に溢れて恰も自身法幢を可睡齋に移すものゝ如し既にして祝國

開堂の吉報至るや師は乃ち可睡齋祝國開堂の吉辰をトして遙祝の法筵を寺門に開き嘗て日置默仙師と道交を訂したる道俗等を招きて祝宴を張れり眞個道誼に厚きものにあらずんば安んぞ此の如きを得んや嗚呼澆季の世此の如き人あり而して道義の光尙一縷を存するを見る。

師眉目清秀風姿都雅一見貴族の風采を帶ぶ而かも其心鐵の如く其膽石の如く亦是れ一個の快男兒たるを失せず宗門の九州探題として尤も適任の稱ある所以

陸鉞巖師（因幡國邑美郡北品治町眞福寺住職）

年齒不惑に逼るも尙孜々汲々として學を廢せず而かも其學植の深博なることは「サッラ」の大沙漠の渺茫として一望際なきが如く其識見の雄邁なることは「ヒマラヤ」の大嶽の嵯峨として高く霄漢を摩するが如

し我が陸鍼巖師の如きは實に宗門有數の學者と謂つべき歟

師は漢學に於て近世の大儒佐藤楚材翁の堂奥に上りたるものなり後曹洞宗大學林に入學して專ら宗乘餘乘の學を修む文學士井上圓了氏哲學館を興し盛んに一派の哲學を唱道するに當り師亦大に見る所あり同館に入りて深く哲學の玄奥を極むるに師は學海に游泳すること二十有餘年而して現時尚學を廢せず徒に敎ゆるの餘孜々汲々として自から勤む此の如くにして已まず則ち其道詣する所果して如何ぞや宗門の望を斯人に屬する亦宜ならずや

師亦定力に於て高からずとせず從來の弊學問あるものは禪定を排し禪定あるものは學問を排す特り師は宗門有數の學者として曾に禪定を排斥せざるのみならず却つて常に禪定の頽廢を回復せんと欲するの志あり禪定回復翁の一子たるに負かずと謂つべし

師品行方正にして毫も喙を容るべき所なし嘗て學を東京に修むるや弊衲破袈裟能く僧繩を守りて俗裝を着けず故に宗門先輩諸師の師を信ずること特に篤く遂に其拔擢を蒙むりて東京曹洞宗中學林敎頭の榮職に任せらるゝに至れり今や師東京曹洞宗中學林敎頭の榮職を辭して鳥取の景福寺に轉住し僧林を開設して育英の任に勉め餘力を以て四方の道俗を導く是を以て道俗の師を景慕すること恰も赤子の慈母に於けるが如し其常に講筵を寺門に開くや往ひて法益に與るもの裁判官あり學士あり紳士あり一として地方上流の紳士にあらざるはなし故を以て晋院日尚淺きにも拘らず其聲望の隆なる實に驚くべきものありと云ふ顧ふに十年二十年の後本山貫首の顯位に昇り宗門の主權を握りて宗門を統治すべきもの師にあらずして誰ぞや師たるもの安んぞ奮はざるべけんや

大辻是山師（東京府芝區伊皿子町大圓寺住職）

大辻是山師は大本山永平寺の大忠臣にして而して宗門の元老たり其永平寺に對して歴史的人物たることは猶在田彦龍、安達達淳諸師の大本山總持寺に對して歴史的人物たるが如し就て永平寺の近世史を問ふべきもの宗門唯一個の師を餘すあるのみ師たるもの安んぞ自重せざるべけんや

師は永平寺故貫首臥雲禪師の高弟にして大政維新の前後に在りて久しく永平寺の役者を勤めたる人なり故に兩本山の歴史に明暢なることは固より論ずるを竢たず

大政維新の時に際し臥雲禪師の主として永平寺總本山論を唱ふるや師は實に參謀として其帷幄に在りたり是を以て大本山總持寺を視ること殆んど俱不戴天の讎敵の如し之に加ふるに一轍なる薩摩氣質を

以てす其一念今日に至るも尚牢として拔くべからざる所以若し夫れ師が維新前後に於ける事業を擧げ來らば一夕の談能く盡くす所にあらざれば茲に之を省くと雖も要するに師が其際に於て永平寺に盡したる大勳偉蹟は少しく當時の事情を知るものは何人も能く記憶する所なり

明治二十五年の夏師が擧げられて曹洞宗事務取扱の任に就くや在田彦龍師も亦擧げられて曹洞宗事務取扱の任に就けり彼れは總持寺の大忠臣にして歴史的關係を永平寺に有し且つ三十年來の宿仇解け去りたるに似て而して未だ毫も解け去らざれば兩師の間歴を知るものは孰れも其衝突の到底免るべからざることを期したりしに果せる哉兩師の意見氷炭相容れず遂に爲めに內務大臣をして其職を解くの已むべからず

ざるに至らしめたるは兩師閥屋の然らしむる處亦是非もなき次第と謂つべし然りと雖も師は之に依りて益々硬骨の譽を博す則ち師や亦實に一種の奇丈夫なる哉

折居光輪師（志摩國答志郡鳥羽町常安寺住職）

穆山和尚の門下人物を出すこと少しとせず特り驪龍頷下の珠を奪却し横拈倒用自在に應用し之を以て名聲を江湖に馳せたるものは我が曹洞宗大學林前數頭折居光輪師なりとす師が宗乘に熟通することは有安老人を除非して宗門只一人なりと稱す此の如きの實力を有して而して此の如きの名譽を荷ふ師の光榮餘りありと謂ふべし

師は本來一流の道人にして不潔なる俗物にあらず故を以て明治二十二年以來宗門の紛々紜々相續して絶ゆる遑なく物議四もに起りて頗る喧囂を極めたりしも嘗て一回も此等の俗事に干與したることなく

始終一貫清節を保ちて唯育英の事業に淬勵し以て今日に至るも尚宗門の葛藤如何なる點にまで達しあるやを知らざるものゝ如し一意宗旨の陸沈を悲み宗門今日の最大急務は全く第二の繼續者を造るに在ることを知りて全力を育英の事業に盡すものにあらずんば何を以て此の如くなることを得んや

抑も宗門の制度を議するは一種の佛事たるに相違なきも元是れ俗事の範圍に攝せらるゝものなれば師の如き學者として一宗の慧命を把持するものは及ぶべき限り近づかざらんことを可とす古人云く人各々能あり不能あり既に能あり不能ある以上は學者たるものは宜しく其能を能とし其不能を不能として之を避くべきなり是れ敢て自身の安全を謀るが爲めにあらず實は宗運を無窮に傳ふる長計たり居士は師が絶へて此の如き不潔極まる俗事に干與せざるを

見て切に宗門の萬歳を三呼せざるを得ず

師天資温良にして毫も人と爭ふことなし故に師を知る者動もすれば漢庭榮巧宦雲客踈邊功可憐聰馬使白首爲誰雄の感慨を抱くものなきにしもあらざれども師に於て固より不平なるものなし天資温良の致す所なりと雖も抑も亦師の中懐一點の俗滓なきに由らずんばあらざるなり

大溪泰童師（東京府芝區三田功運町功運寺住職）

若し時務に就て之を論せば師は末派總代委員中固より吉川義道師等に如かず然れども其學歴の正確にして而して學問に豊富なる點に就て之を論ぜば吉川義道師等固より師に如かざるなり

師は天桂一派の人にして故與聖寺大溪雪巖師の令嗣なり故に能く其家風を守りて家道を失墜せず議者或は天桂家の甚だ振はざるを慨く

と雖も天桂家の振はざるは天桂家全体の責任にして敢て師一人の責任にあらず且つ一盛一衰は社會の通則なるを以て盛以て喜ぶに足らず衰以て悲むに足らず乃ち天桂家の振はざるを以て特り師の責任に歸せんとす亦酷なりと謂つべし

師軀幹偉大なりと雖も擧措頗る優尚なり故に動もすれば師を以て天桂一派の人に似ずと云ふものありと雖も是れ未だ深く師を知らざるの致す所のみ昔は師の家祖天桂傳尊禪師頗る貍奴を愛す以爲らく彼れ平素柔輭にして能く人と馴る而かも其鼠を捕ふるや電の如き眼光劍の如き爪牙一見人をして毛髪を竪起せしむるものあり須ひて以て衲子平生の作略に模範たらしむるに足れりと願ふに師が擧措の優尚なる或は是れ却つて天桂家の天桂家たる所以にあらざるなきか乃ち居士が師に敬服する所のもの豈に特り學歴と學問とに在らんや

織田雪巖師（豐後國東國東郡豐崎村泉福寺住職）

明治二十三年の交に當り曹洞宗務局東西兩都に曹洞宗中學林を公設するの令を下し師を擧げて西京中學林監理の職に任ず師乃ち萱夜事に其計畫に從ひ西に說き東に論して諄々倦む所なし惜哉時機未だ熟せずして事遂に成るに至らず然りと雖も成敗は自然の數のみ人力の得て奈何ともする所にあらず果して然らば西京中學林の成敗何ぞ師の伎倆を輕重するに足らんや

師は天性一種の事業家たる才器を有す而して今日尙未だ大名を博するに足るべき事業を樹てざるは蓋し大に異日に待つ處あるによりて然るならん師年齒五十二三而して成川百祌翁の後を承けて豐後の泉福寺に主たり其門地此の如く高く而して其人天性一種の事業家的才器を有し且併すに地方の望を負ふを以てす師にして若し一たび奮ふ

所あらんか功名を宗史に重ぬる豈に難しとせんや

師今や大分縣第一號取締の職を奉じて地方宗務を處理し一意管下寺院の幸福を增進せんことを謀る其志義勇に厚き地方取締中罕れに見る所亦宗門の良二千石たることを減せず

師思想縝密而して說敎を能くし書に巧なり故に地方道俗の歸嚮頗る篤し成川百祌翁嘗て說敎の大家を以て本寺に住し南船北馬只布敎是れ努む師說敎の名家を以て其後を承け前住老師の事業を失墜せず以て兼望を收む謂ゆる推挽其宜しきを得たる者非歟百祌翁雪巖師以て如何と爲すか

鴻春倪師（遠江國秋葉寺住職）

明治の初年徹されて大敎院に出仕し辯論の上乘交際の達人として常に神官僧侶の推重を受けたるものを雪門の尊嗣兒鴻春倪師なりとす」

師は有名なる交際の達人にして一たび師が交際の手際を見れば如何なる人と雖も其巧妙に驚かざるは少し然れども師が特處長處粹處は決して區々交際の一術にあらざるなり

營て大教院の教會新聞を發行するや師は掛員として之に從事したり幾もなくして其發刊の已むべからざるに逢ふや師は乃ち佐久間貞一、大内青巒、養鸕大俊、宏佛海等の諸氏と相謀り隔日に明教新誌を發行して南針を教門に與ふ是を日本佛教新聞發行の嚆矢と爲す此時に當り

て肇穀の下僅かに東京日々新聞等數種の新聞紙あるのみ而かも師が思想縝密にして事業の籌策に巧妙なる世間の人士すら尚未だ新聞紙の必要を感せざる時に當りて佛教專門新聞の必要を感じ宏佛海等の諸氏といふに相謀りて之を發行し年月を閲すると殆んど二十年號を重ぬること殆んど三千幾百號に至り而して今日宏佛海氏の手に在り

て尚一回の否運に際せず連綿として其旺盛を相續す師が先見の明炳として炬の如くなるに依らずんば何を以て此の如きを得んや須らく知るべし師の特處長處粹處は事業に在りて謂ゆる交際辯論の巧妙は其第二第三に在るを

明教新誌の發行は師が半生の事業中尤も著大なるものなりと雖も師一人の力を以て發行したるものにあらず云はゞ師及宏、大内、佐久間等七氏連帶の事業なれば之を以て全く師の功勳に歸するは固より不當の譏を免れず然らば則ち明教新誌發行の外に於て師の事業百世に垂るべきものなきか云くあり何ぞや北海道に新寺を建立し盛んに洞上の宗風を北門に宣揚したる是れなり此の如きの事業は僧侶として佛教新聞發行の事業よりも尚必要の事業なり師既に此好事業を成功し法燈を北門に掲ぐ諸を彼の大内等諸氏と謀りて明教新誌を發行したる

るに比す願ふに其輕重知る人ぞ知らん

今や師住して秋葉寺に在り而して久しく新事業の樹立したるを聞かず豈に秋風英雄を吹老ふるが爲めか公道世間唯白髮貴人頭上不曾饒鬢邊の二毛其功名心を老却すること此の如し誰か師の爲めに一掬の感涙を濺がざるを得んや

鴻春舸師（若狹國三方部四郷村瑞林寺住職）

居士嘗て香國土居通豫先生（今の名古屋郵便電信局長）を浪華此花街の客寓に訪ひ詩談數論時を移す先生居士に謂つて云く君若北に鴻春舸氏あるを知るか彼れ佛門の名士にして詩を能くす頃日書を予に致して其是正を求む此稿即ち是れなりと一稿を出して居士に示す居士受けて之を讀むに詩品優麗清新而して一點の俗氣を留めず忽にして五律一首を撮見す敎友木田韜光師が敎導職を廢せられたるを祝するの

詩に和したる者に係る識見超邁尋常庸僧と迥然其趣を同ふせず乃ち潜かに以爲らく吾宗果して此の如き大丈夫兒あるかと後師が故慈眼寺月珊和尙の寧馨兒たるを聞くに及びて始めて高邁の識見由つて淵源する所あるを知る

師才氣人に絶す故を以て人の能くする所能せずと云ふとなし尤も說敎に好手の評あり其說敎講習生として嘗て木田韜光師等と一もに說敎講習所に在るや短期の日月を以て豫定の學科を卒らさるべからざるにかゝわらず師は特り閑々として甚だ心を勞せず而して一たび試場に上りて試問を受くるや萬言の答案筆を下せば忽ち成る天稟の才氣人に絶するものあるにあらずんば安んぞ此の如きを得んや唯勤もすれば人を凌ぐが如き風ありとて之を以て師の短處に加ふるものなきにしもあらず然れども是れ師が自信に篤き一證として見れば可な

り一短を擧げて九長を沒す君子は爲さず

温嶽耕堂師（三河國額田郡深溝村本光寺住職）

師は愛如縣副取締として現今恰も眷記官的の地位に立てり然れども其地方宗務の大體に通じて而して宗務を處理するの敏速なる地方副取締中に於て多く其比を見ざる所なり

僧家の短處は從來俗務に通ぜざるにあり然れども此短處を有するが故に僧家の德光一層其燦然たるを見る然れば則ち僧家は遂に俗務を知らざるも可なるか此疑問を說明することと亦無用の事業にあらざるに似たり

謂ゆる俗務なるもの本來二種の別あり曰く王法に屬する俗務曰く佛法に屬する俗務王法に屬する俗務に在つては俗人之れに當り佛法に屬する俗務に在つては僧家之れに當る何を以て然らざるを得ざるか

曰く凡そ其の俗人たると僧家たるとを論せず既に一身なるものあり て活動する以上は自身之を治むるは當然の務たり然れども進んで一社會を成すに至つては個々自から治むるは頗る其繁に堪へざるのみならず實際に臨みて到底行ひ得べからざるが故に遂に國家には政府なるものを設け各人權利の幾分を預りて國民一般を治むる所以なり列國各々固有の國體あれば特別の國情を有する國家に在りては或は君主獨裁なるものあり或は我が國家の如き君民同治の制に據るもの少なからずと雖も要するに之を治むる所以の目的は彼此同一にして毫も異ることあることなし由是觀之宗門に衙門を設け宗制宗規を制作して末派の寺院僧侶を治むるは亦猶此理に依準するものなるか乃ち俗務の事たる俗の俗なるものに相違なきも宗門若し此俗務を舍て願みざる時は忽ちにして本末の間支離し敎學の衰滅裂するに至ら

ん佛法に屬するの俗務僧家之を執ることを辭すべからざる所以之を要するに師の如き敏腕の人物ありて佛法に屬する俗務を執り管內寺院をして其保護に安んぜしむるものあるにあらずんば地方敎學の振起驢年にも見るべからざるなり況んや師は說敎に於て好手々中の好手なるをや夫れ佛法に屬するの俗務を執るすら尙菩薩の大行たり之に加ふるに本來布敎の術に巧なるをや乃ち師が愛知縣に副取締として書記官的の地位に在るも何ぞ師の淸德を汚すに足らんや

大森惠範師（相模國足柄上郡塚原村長泉院住職）

師は〇〇〇〇師とゝもに幼時湘南の二秀才と稱せらる此時に當りて今の畔上總持寺貫首神奈川縣第二號取締として同郡岡本の最乘寺に在り深く師等二秀才の才を愛し拔擢して東都の專門本校に遊學せしむ晝錦の榮を荷ひ共に桑梓に還るに迨び〇〇師は才學を以て育英の

任に膺り師は力行を以て布敎の任に當る而して才學を以て育英の任に當りたるものは今日赫々の盛名なく而して力行を以て布敎の任に膺りたるものは之を久ふして其名益々顯る豈に育英の業は遂に布敎に及ばざるものあるか否才學は以て力行に克つこと能はざるなり

師は卍山家の一尊宿なり故に其行業の綿密なること尋常尊宿の企て及ぶ所にあらず長泉院は其寺格小本寺たり而かも師は年齒未だ而立に及ばずして同寺に晋院し爾來意を品行に注ぎて嘗て一回だも醜聲を洩したることなきは少壯人士の尤も難しと爲す所なり少壯の時血氣未だ定まらず之を戒むる色に在りと古聖人は云へり然り而して師は少壯の年紀を以て小本寺格の寺門に晋院し能く己に克ちて自ら戒む忍耐に强きものにあらずんば能はず

師天資頴悟而して尤も宗學に長ず既に此長處あり以て衆望を收むる

に足る況んや品行方正能く地方人士の典型たるに堪へたるをや謂ゆる龍の水を得虎の山に倚る者非歟師夫れ益々奮へよや

大佛輔敎師（武蔵國比企郡七郷村金泉寺住職）

宗學に通ずるもの未だ必ずしも宗務に通せず宗務に通ずるもの亦未だ必ずしも宗學に通せず此二者を兼ねて宗門幾多の望を負ふものを我が曹洞宗大學林學監大佛輔敎師となす

師は大學林出身者中の尤物なり其嘗て學を大學林に修むるや一書を讀む理義必ず會得し盡さゞれば休せず故に燗々たる眼光は常に紙背に透徹して玲瓏たり此注意を須ひて宗乘を專門的に修む一派の宗乘學者として宗門多數の推重を受くる所以なり

師天資怜悧而して尤も機を見るに敏なり故に師を知らざるものは動もすれば師を以て輕薄才子と一般に見るものなきにしもあらずと雖

も居士を以て之を見れば是れ皮想の妄見に過ぎざるのみ願ふに師の天資怜悧にして機を見るに敏なる一事一物を處するに當り或は其敏活靈石火の如きものあらん或は又閃電光の如きものあらん而かも庸常の凡漢は一瞬の間師に幾多の作用あるを仰ぎ見て目眩し氣惑ふて其眞を認むる能はず是を以て適ま此妄評を下すあるのみ以て師が機敏の一端を窺ふに足るべし

師今や曹洞宗大學林に學監として日夕林務に鞅掌し尤も公正忠實の稱あり師が宗門幾多の望を負ふ所以のもの豈夫れ偶然ならんや

渡邊實雄師（和泉國大島郡向井村紅谷庵住職）

故能仁柏巖師の敎を以て兵庫の般若林に據るや當時故不仁門眉柏師は禪を以て堺の紅谷庵に據り各々生計の枯淡と門庭の峻嚴とを以て學者を挨つ故に當時に於ける紅谷庵は當時に於ける般若林と丶もに

相双びて名聲關西に嘖々たり

叢林の興廢は一に師家其人の伎倆に基くこと疑なし知らず故眉柏師去後の紅谷庵は如何なりしか今や渡邊寶雄師濃州岩手の禪幢寺を木田韜光師に付し孤錫悠然として紅谷庵に卓せり居士之を聞きて漸く愁眉を快展することを得たり

師が定力に於て出格の作略あることは居士等乳臭兒の言を待ちて而して後知らざるなり師が徳風の高くして而して戒行の嚴なること亦居士等乳臭兒の言を待ちて而して後知らざるなり實に師は關西の禪虎而して其徳行に於て宗門後進の典型たり斯人にして紅谷庵に住山す前住諸師の遺業居士斷じて其失墜の憂なきことを知る

師天資磊落にして毫も事物に拘泥することなし而かも其行爲篤實にして人を容るゝの量に富み頗る門下に親切なり故を以て紅谷庵の叢

社禪風依然として旺盛なり

抑も師は永平寺將來の貫首として尤も徳望を同門に有するの人なり而して其人物事業兩ながら群を絶す師たるもの宜しく自重すべきなり

渡邊寂潭師（越中國射水郡神代村延暦寺住職）

監院は聖職なり當に貫首に對して輔弼の任を盡さゞるべからざるのみならず亦本山に對し教政を執らざるべからず故に貫首の監院を擇ぶや單に時務に通ずるの故を以て之を擧げず必ず道心の深淺を詮考し果して此聖職に當り聖務を盡すに足るや否やを十分に認め了るにあらざれば敢て取らず是を以て監院にして時務に通せざるものなく又道心の深からざるものなし我が大本山總持寺副監院渡邊寂潭師の如きも亦既に此手續に依りて副監院の聖職に登庸せらる乃ち其榮や實に大なりと謂つべし

居士未だ師に於て如何なる長處を有するかを知らず然れども師が就職以來一意辛酸を嘗めて全力を本山の山務に盡す所を見れば師が胸中自から赤誠の日月を貫くものありて存するや疑なし是れ師が昨明治二十五年三月以來只一人總持寺に留守として山務を整理し石川監院等をして絶へて内顧の憂なからしめたる所以か兎に角師が可もなく不可もなきが如くにして而して其實總持寺に對し偉大の功勳ある は蓋し何人も未だ想ひ到らざる所なるべし老師が謂ゆる良賈は深く藏して虚きが如く君子は盛徳あつて容貌愚なるが如き者居士師に於て乎之を見る

師天性温厚にして歩々實地を踏む故に人之に綽號を贈りて石部金吉と云ふ其正直行々焉たる人物なること此綽號に徴して知るべし

師の手簡に至りては理義明晰行文洗麗簡にして盡せり故に師を知らざるものは師の長處を以て恰も手簡に在るものゝ如く誤認するものなきにあらず然れども手簡豈に眞に師の長處ならんや之を要するに師の長處は別に在るあり而して謂ゆる手簡に好手なる者師に於て固より緒餘の閑事たるのみ居士の如きは決して此の如き俗評を信ずることを能はず

渡邊禪戒師（武藏國比企郡野本村萬松寺住職）

時に利不利あり勢に可不可あることを知りて悲むべき境遇に逢へども敢て悲まず驚くべき境遇に逢へども敢て驚かず泰然自若として世に處す師の如きは實に宗門中多く猥易からざるの君子と謂つべき歟

師は末派總代委員として末派一萬四千の寺院を代表し曹洞宗務局所在の地に駐在して曹洞宗務局監督の地位に立てるものなり故に師が宗門政務の大躰に通ずることは固より論ずるを竢たざる所然らば則

ち師の長處は宗門に於て單に政務のみにあるかと云ふに敢て然らず師の長處は師が宗門の政務に巧なるにあると同時に亦宗門の事務に巧なるにあり唯天資温厚老實なるが故に其施設の事業は實行を期するに止まり秘して人目に觸れしめず是を以て人只温厚老實の君子を以て師を敬するのみ未だ師に此の如き大手腕あることを知らざるもの多しと云ふ

抑も末派總代委員の中に於て才略を以て勝つ者吉川義道師あり德望を以て勝つ者阿部太環師あり門地と學問とを以て勝つ者大溪泰童師あり特り德行を以て勝つ者に至りては四末派總代委員中に於て只師あるのみ師既に德行の稱あり而して宗門の政務と事務に通ず末派總代委員に撰出せられて曹洞宗務局監督の地位に立てる所以歟

輕部彦勇師（美濃國土岐郡鶴里村莊嚴寺住職）

師は曹洞宗專門本校出身者の一人にして而して其群に於て鐵中の鏘々たるものなり故に其宗學に於て啻に七通八達するのみならず凡そ普通の學一として涉獵せざる所なし鏘々の聲曹洞宗務局の耳に達して遂に曹洞宗大學林學監に擧げらるゝに至りたる所以歟

居士の京都に在るや師も亦學んで京都に在り當時師は眞宗本願寺の某校に敎師として餘暇敎部の研究に力を致したりき今や曹洞宗大學林學監の榮職を奉じ宗學を以て龍象を薫陶す其適任の稱ある固より偶然にあらざるなり

抑も曹洞宗大學林は宗門龍象の集まる處非凡の學力を有するにあらずんば何を以てか之に敎務學監として敎授の任に當ることを得んや而かも林古芳神崎省新の諸師が十分に林生の信用を博する能はずして此榮職を棄て去りしにもかゝわらず師は其精通する所の宗學を以

て林生に敎へ而して深く林生の信用を博す學問深淵にして兼ねて後進を愛するの篤きにあらずんば何を以てか其地位の鞏固なる此の如きを得んや

師天資快濶毫も意を瑣事に留めず宛然古豪傑の風あり鐵中の鏘々たるに背かずと謂つべきなり

吉川義道師（丹波國北桑田郡弓削村永林寺住職）

末派總代委員中第一の立物として隱然大勢力を宗門に有するものは吉川義道師なり師天資頴敏にして宗門の制度に精通す故を以て宗門に於ける政務の如きは師の尤も長處にして久しく宗門政務の衝に當りたるものと雖も或は師に三舍を避くることありと云ふ殊に其人と爲り剛毅果斷の質たるを以て未だ曾て挫折を以て其氣を沮喪せしめず亦以て一流の俊豪と謂つべき歟

師は京都府分局に取締として嘗て地方宗務の衝に當りたるの人なり而して當時分局に於て樹立したる所の功少なからざるのみならず夙に宗門良二千石の稱ありしを以て其宗門の事務に通曉したることは固より疑ふべからずと雖も宗門の政務に至りては何人も當時師に疑ふ所なきを得ざりし故に其互撰に依りて末派總代委員に擧げらるゝや宗門皆其伎倆如何に眼を注ぎたりしに爾來師が政務に對する一施一爲は實に此等疑惑者の疑團を冰解せしむべき伎倆多かりし乃ち隱然瀧谷內閣を輔けて其信ずる所を決行せしめしが如き又は衆中會に參謀として大に同盟會等に當りしが如き其形迹に就て之を論せば居士等甚だ心服しがたきもの少なからずと雖も兎に角政務の才隨處に煥發するが如き弘化年度の人としては何人も異數の感なきを得ざるべし殊に兩本山分合問題に關して師は他の末派總代委員とゝもに服

部星見の兩事務取扱を輔け頻りに處分上の意見を主務大臣に上申し主務大臣をして遂に其意見を容れしむるに至りしとの風説あるは果して眞乎其是非は居士等有髪漢の知る所にあらざるも亦以て政務の才先輩諸師を凌ぐものあるを見るべし

師は少小包を屢にして玄齢和尚に遠の可睡に隨ひ會下に詰頭として普照、快川、梅綻諸師と共に夙に才名を四方に轟かしたるものなり後故青蔭禪師に福井の孝顯寺に隨ひ造詣する所少しとせず故に當時に於ける師の長處は禪定に在りて區々俗務の上に在らざりしに時勢の變師をして長を宗門の政務事務に稱せらるゝの奇觀を見るに至る宗門の政務事務或る意味に於て一種の佛事たるに相違なきも當年の禪客にして此窠臼に墜落す居士大に惜む所なきを得ず師以て如何となすか

鷹林冷生師（甲斐國中巨摩郡龍王村慈照寺住職）

大本山永平寺に御山監院とし大本山總持寺の御山監院たる石川素童師と相須ちて宗門至高の聖職に立つものは故白鳥鼎三翁の一子鷹林冷生師なりとす鼎三翁は宗門近代の大善知識なり乃ち鳳雛鷲兒に富む固より其所なりと雖も就中鳳雛鷲兒中の鳳雛鷲兒として尤も乃翁の殊愛を受けたるものは願ふに師に過ぎたるものなからん翁の化を戢むる死去元知萬事空、但悲不見九州同、王師北定中原日、家祭無忘告乃翁と當時此の如き遺訓を師に與へしや否やを知らずと雖も師が一意乃翁の遺志を繼承し全力を永平寺の守護に盡すに至つては翁が大寂定中の歡喜以て想見すべきなり

石川總持寺監院が總持寺に忠節なる其極總持寺の分離獨立を以て宗門百年の長計なりと牢信し非常手段に訴へて遂に之を發表するに至

れり而かも師は之れと反對の地位に立つのみならず總持寺分離の一擧に對して師は全く反對の意見を有し其不可を極論して熱心に宗門百年の長計は兩山併立制度に在ることを說く然れども絕學無爲の道人固より宗門當世の務を知るに由なきを以て之を東京出張所駐劄の監院等に一任し只御山監院の聖職に維れ努む太平の良相亂世の英雄と一例に見るべからざる所以なり

師壯年にして既に道德堅固の名あり而して自から持することと老て益々嚴なり之に加ふるに定力の富贍を以てす乃翁の遺志を繼承して家道を失墜せざる所以、夙乃ち亦一流の碩德として大に崇重を加へざるべからざるなり

高岡白鳳師（上野國東群馬郡前橋町龍海院住職）

退藏雖似雲沒岫、訃音落日泣拋笻、前言有約洛看花、後事無縁播際月、口焉

敎禪不立風、文留天地堪成筏、燒香靜坐更思君、白鷺城高秋砭骨、是れ豈に師が播の清光に在つて退峰藏雲和尙を悼むの詩にむらずや流麗の調を以て眞摯の情を寫す閱し去つて誰か嗚咽せざるもの是れ此詩の人口に膾炙し師の英名と共にも益々光彩を放つ所以なり

師は蕉屋道人の雷名ともに詩人書家の觀念を世人に惹くのみならず亦一派の學者として幾多後進の推重を受くるものなり只師や天資放縱浮世を三分五釐的に看過し日夕青州の從事と相親しむ故に何人も墮落僧を以て師を見ざるものなしと雖も安んぞ知らん師が罪なきが如き愛らしき否小供らしき眼底には萬斛憂宗の熱淚滾々として常に空湧しつゝあるを謂ゆる面を見て人を測るは痴の太甚しき者非耶」晩年志を發して出家する者宗門之を晩年僧と呼ぶ師亦晩年僧の一人なり故に師の世故に明かなる俗人をして往々一驚を喫却せしむるこ

とありと云ふ明治十四年曹洞宗兩本山の議會を東京に開くや師亦末派總代議員として出席し頻りに噉肉蓄妻案の不可を論ず曰く噉肉蓄妻の事戒律の嚴禁する所なりと雖も今日の時世到底言ふべくして行ふべからず此の如きの法令を宗門に布き以て告朔の餼羊を存せんよりは寧ろ噉肉蓄妻を公許して末派僧侶の行爲を撿束せざるに如かず乃ち撿束せずと雖も人々固より佛祖屋裏の兒孫己靈を昧却して汚點を宗門に與ふるが如きことを爲さゞるべし夫れ或は本員の說を容れざらんか本員は吾眼を抉つて宗衙の門頭に懸け以て此案の行ふべからざるを見んと奇論に失すと雖も亦以て大に當路の參考に資すべきなり

師年齒六十四五常に吾宗の逸民を以て自から處するものゝ如し而かも時ありて宗政に容喙し革弊を囂々す其髯白しと雖も其心赤しと謂

つべし

大徹圓洲師（越中國上新川郡眼目村立川寺住職）

眼目の立川寺は峩山門下十哲の一人たる大徹宗令禪師開創の道場にして而して現住大徹圓洲師は其遠裔たり故を以て師は大徹を姓とす以て師が中懷深く遠祖大徹宗令禪師を追慕するの深きを見るべきなり

師は大本山永平寺の御山監院鷹林冷生師とゝもに宗門太平の良相として一點の申分なき人なり其性質は溫厚たり其行爲は正直行々焉たり故に大本山總持寺東京出張所監院として日夕宗務に從事するや一も新意を出さず又一も權謀術數を用ゆることなく公平忠實を以て之れに當り嘗て私曲を其間に挾みたることなし亂世の英雄と一例に見るべからざる所以

師の東京出張所に在るや節倹力行嚴正自から持す故に師の性行を知らざるものは銀山鐵壁近くべからざるが如く思料するものなきにあらざれども深く師を知るものは是を以て益々師を推重心服す何を以てか然る曰く師の風貌の嚴格なるにかゝわらず師は無益の事に於て人と抗爭せず能く人を容るゝの好人物なればなり故に一たび之と交を訂す之を久ふして益々篤し天性人情に厚きものにあらざれば則ち能はず

師宗門當世の務に於て或は甚だ精通せざるが如きの憾なきにあらざれども人を容るゝの量は慥かにあり人を御するの徳は慥にあり將たるの才は慥かにあり事を決するの膽は慥かにあり乃ち時務に暗きが如きの形迹ありと雖も亦何ぞ師の御山監院たるを傷けんや

師宗旨に於て深く造詣する所あり只天性功名を忌ひ故に殊更に秘して人に誇らず然れども既に大徹を以て姓となす肩を遠祖宗禪師に比する所以歟其旨蓋し徹なりと謂つべし

田村大機師（越後國古志郡六日市村龍昌寺前住職）

居士つねに田村大機師の道譽を聞く毎に未だ嘗て故海嶽義祐老師の不遇を悲まずんばあらず老師の學老師の徳ありて而して遂に其垂天の羽翼を天下に開展することを能はず大志を齎らして空しく化を他界に遷す肉眼明を失して進退意の如くならざるの致す所復如何ともするなしと雖も其終生不遇にしてれども平生人に誇りて云く今の大善知識を以て志を一世に得るもの固より盲漢義祐の企て及ぶ所にあらずと雖も田村大機の如き今の大善知識と比肩して恥ざる法嗣を有するものに至りては宗門唯義祐一人あるのみ乃ち義祐今日死すと雖も萬々憾なしと今や老師逝ひて

柩内既に冷かなり而かも田村大機師の尊遺業を繼承し盛んに化を北越に擅にするを聞く是れ居士等が故義祐老師の遺身舍利として常に深く師を景慕する所以なり

師は謂ゆる晩年僧なり二十餘歳にして大に感ずる所あり妻孥を抛つて猛然出家し故義祐老師の門に投じて刻苦業を修む故に故義祐老師の師を遇する益々深く遂に衣鉢を傳へて法藏を付す是を以て宗乘餘乘の學精通せさる所なく兼て道行綿密なり其嘗て大本山永平寺後堂の榮職に在るや實蹤躬行を以て大衆を統ふ故を以て滿堂の僧衆一時靡然として師の德化に向ふ今や北越に在りて尊宗風の宣揚に淬勵し老境日々に逼り年齒益々頽るゝにも關らず一意天職を盡して已まず故義祐老師の寧馨兒たるに奉負せずと謂つべし

之を道塗の風說に聞く海藏現董佐藤實英師は師が前住老師の令嗣たるを以て潜かに海藏の法席を師に讓らんと欲するの志ありと實英師は有道の君子にして深く前住故義祐老師の恩澤に沐するの人なり乃ち法席を以て潜かに前住老師の令嗣に讓らんと欲す義に富み情に篤きものにあらざれば能はず師は實英師に於て固より先輩たり故に當然の理を以て之を論ぜば先輩にして後進の法席を受く少しく秩序を過つが如きの感あるも湘南の海藏寺は關左第一の禪林にして嘗て其先師の叢席を開きたる處今や關左の佛法蕃靡として振はざる久し師にして苟も先師の遺席に據り要津を坐斷して凡聖を接得せば先師未了の事業庶幾くは其功を奏するを得ん然らば則ち故義祐老師大寂定中の歡喜以て知るべきなり師たるもの安んぞ區々人情に拘泥して實英師の好意を水泡に歸せしむべけんや

嶽尾泰忍師（岩代國伊達郡梁川村與國寺住職）

故新井如禪老師綿密の家風を以て梁川の興國寺に據り盛んに法輪を轉じて遠邇の道俗を化す故を以て時人其名を言はず之を崇信して東國の活如來と稱す今や師亦綿密の家風を以て興國寺に據り活如來の遺業を繼承して一意其擴充に努む活如來大寂定中の歡喜以て知るべきなり

師の長處の禪定に在るかは居士の未だ悉すを得ざる處而かも師が道行の綿密なるさすがは故如禪老師の後嘗たるに耻ぢず と謂つべし師既に此綿密の道行を以て嘗て後堂として大本山總持寺の僧堂に雲兄水弟を薰陶し今や又故如禪老師の遺業を承けて大に法輪を東北の野に轉ず苟も此志にして挫けず此行にして撓むなくんば第二の活如來として東北精神界の樞機を握らんこと豈に至難の事業ならんや師の前途誠に多望なりと謂つべし

然り師の前途は誠に多望なり然るに宗門の未だ師を知らざるもの勘もすれば師を以て理財に巧妙なるものと誤認するものなきにあらず是れ或は師が嘗て護法會の事務に執掌したるを見て深く其人の閲歷と人物とを究めず漫浪に想像を下したる結果に相違なからん孔子嘗て委吏と爲る然れども人遂に孔子を以て銀行の手代視せず師が護法會の事務に掌執したる一事亦猶此の如き歟要するに師は小心翼々の人故を以て啻に道行の綿密なるのみならず苟も平生執掌する所の事務に對して細緻の思想を傾けざるはなし是れ護法會總轄の推薦に仍り護法會用掛に任ぜられたる所以歟而して師の志固より區々理財の上にあらざるなり

谷垣省拙師（丹波國天田郡福知山町久昌寺住職）

師は故天德前住老梅活宗老師の法弟なり其名聲活宗老師の如く甚だ

顯はれず地位亦活宗老師に比して稍々低きに失すと雖も之を以て師の眞價を品するは固より大早計の太甚しきものなり師の眞價豈に名聲の大小地位の高低に依りて增減せられんや

師は東都駒込吉祥寺學寮の出身にして殊に漢籍に精通せり後撥草參玄心血を禪定に濺ぐ故を以て定力尤も高く道德頗る堅固なり是れ三丹奉佛の徒師を崇敬して活如來と稱する所以なり

師雪頂龐眉年紀既に古稀を過ぐるもの六而かも寺門の灰燼に委したるを慨嘆して遂に之を再建せり而して輪奐の美却つて舊觀に顧つ又餘力を以て寺門に一學舍を開設し檀信徒の子弟を集め敎師を雇聘して英學、漢學、數學等を敎授せしむ若し夫れ結制の助化授戒の戒師等に至りては師の天職固より既に此に在るを以て苟も請待するものあれば必ず老骨に鞭ちて往く未だ嘗て事を以て之を辭せず鏗鏘たる哉此

翁

師天資豪膽にして百雷頭上に墜ち來ることありとするも決して驚くことなし而かも其平生の擧措は因循乎として甚だ天資の豪膽なるに似ず故に師を評する者皆云ふ師平生の擧措恰も闇がりから牛を牽出すに似たりと嗚呼是れ師の眞に豪膽なる所以か今の殊更に活潑々地の行爲を粧ひて潛かに豪膽の虛名を衒賣せんと欲するもの師に對して須らく慚愧すべし

師又詩に巧に書を能くす老高僧中罕れに見る所なりと云ふ

師が平生の逸事記すべきもの頗る多し唯紙面限りありて之を揭ぐること能はず居士の尤も遺憾とする所なり之を要するに師は古高僧中の逸物にして名利の閑妄想なきこと今時多く見ざる處なり今や道行益々固く弘敎愈々努め活如來として到る處隨喜渴仰の涙を師に濺が

ざるはなし既に此實力を有す則ち名聲の甚だ揚がらざる門地の稍低き何ぞ師を輕重するに足らんや

瀧田融智師（美濃國武儀郡下有知村龍泰寺住職）

學力に富むもの未だ必ずしも膽力に富むもの亦未だ必ずしも學力に富まず此二者を併せて而して殊更に自から售ることを欲せざるものは我が龍泰寺の住職瀧田融智師なりとす今や滔々たる天下身に一能一藝の取るべきなきにもかゝわらず厚顔自から進んで虛名を釣らんとす而かも師の如きは學力膽力の富贍なるあり兼ねて偉大の功勳を有するにもかゝわらず東濃の山間に韜晦し一意接化に努めて恰も自から知らざるもの、如し佛祖の心を心とし佛祖の行を行とするものにあらずんば安んぞ此の如きを得んや師が半生の偉業は明治十二三年の交師自から支那の內地に入り天童

如淨禪師の寶塔を淨慈に建てたるに在り支那の事情に通曉するものは何人も支那內地に於ける外國人の旅行を一大危險なりとして自から戒め人をも戒しむるを例とす今日尙然り況んや明治十二三年の交に在りては危險の度殊に太甚しく曾に吾同胞を嘲り罵りて東洋々々と呼ぶのみならず甚しきに至りては日本政府の間諜なりと疑ひ殘忍酷薄の手段を以て之を殺すこと少しとせざるをや此時に當り師は天童如淨禪師を追慕するの情切如として禁ずる能はず乃ち行脚を兼ねて支那に入り上海を經て寧波に入り遂に鄞縣に至りて錫を太白山天童寺に卓し靜かに支那佛法の現狀を觀察す以て其膽力の尋常ならざるを見るべし支那の佛法混亂腐敗して到底學ぶに足らざることを知るに及びて如淨禪師を追懷するの念益々禁ずる能はず於是乎其塔を禮せんと欲し天童を辭して淨慈に往く誰か圖らん禪師の塔痕跡を淨

慈に留めざらんとは師此時の失望果して如何ぞや於是乎師大に發奮する所あり直に錫を回らして歸朝し有縁の道俗を募りて多少の建碑費を得再び支那に航して無縫の寶塔を淨慈寺畔如淨禪師埋骨の地に建つ夫れ如淨禪師は高祖承陽大師法統を承くるの本師にして而して日本曹洞宗法水の源泉たり師が之を追慕するの深きや當時一書生の身を以て其寶塔の荒蕪を悲み再び異域に航して之を再造す至孝の情人に絶するものあるにあらずんば何を以てか此の如きを得んや

師今や岐阜縣に取締として地方事務の衝に當ると雖も宗務に鞅掌するが如きは固より師の長處にあらず師の長處は寧に學力膽力の富贍なるに在り師が前半生の事業既に此の如く偉大なり若し此學力と膽力とを用ひて經營せば師が後半生の事業は壯麗雄偉定めて人を驚かすものあらんか居士願を延ひて待つ

武澤法雲師（播磨國豐島郡池田町大廣寺住職）

池田は攝北第一の勝區にして雄略天皇の御宇工女呉織、技織の始めて渡來したる處故に唐船が淵、染殿等の舊跡多く其地勢たる箕面山の靈瀑を東に控へて猪名の篠原を西に抱き背後に能勢の山脉を負ひ前面十數里の平野を隔てゝ遠く河、泉、紀、淡の諸州に臨む此の如き勝區を撰み天巖越禪師を請して大廣寺を背後の半腹に搬建したるものは此勝區に出身して雄名を戰國時代に遺かしたる池田筑後守其人なり故道寛泰橋老師卍山下の尊宿を以て當寺に住山し大本山總持寺に輪番住持を勤め樹立する所頗る多し武澤法雲師其法嗣を以て之を輔佐し老師の歿後三代を隔てゝ當寺の法席を蜜し弘敎の餘暇を以て保存の資を蓄へ寺門を修理して舊觀に復す平素意を寺門の興隆に致すにあらずんば何を以てか此の如きを得んや

師天資謹厚にして鉢芒を露はさず嘗て故勅賜弘濟慈德禪師に加賀の天德に侍して實參實悟し後狩野白堂居士に從ふて普通佛敎を修め駐仙、香港、方外、天柱の諸師と莫逆の友たり而かも知足安分の聖訓を守りて敢て顯達を覬はず身は小木寺隨意會格の當寺に住し力の及ぶ限りに於て門下を接し檀信を導びく故を以て其名甚だ顯はれず然りと雖も其名の甚だ顯はれざる所以は師に於て甚だ顯はるゝ所以なるか則ち師や實に古道を行ふものと謂つべし

高田道見師（當時東京市芝區愛宕下青松寺留錫）

其風采は宛然田舍の一老嫗の如し故に道俗に對して大敎を宣說するや絶へて自身の風を粧はず老婆心切にして慈悲落草す而かも其氣は嶙峋其志は雄偉にして甚だ風采の老嫗に類するに似ず若し太史公をして宗門に生れしめんか亦高田道見師に驚く所なくんばあらず

師は備後國三上郡峰田村仲藏寺の法嗣にして久しく尾州三淵正眼寺に安居し故溝聽水老師に參じて必要を研究したる人なり後東京に來りて愛岩下の青松寺に留錫し北野元峰師を輔翼して餘力內外の典籍に涉獵す故に一たび道俗に對して大敎を宣ぶるや滿腹の思想口を衝ひて滾々流出し恰も繭の絲を吐くと異るなし而して條理井然毫末も混亂せず沈着の質該博の識を以てするにあらずんば何を以てか此の如きを得んや

師年齒三十五六老書生にあらずと云ふべからず而かも絶へて身を安逸の地に置くことを冀はず青松寺の寺務を總べ寺主北野元峰師を輔けて佛法を中流以上の人士に注入することに是れ努む而して更に靑年書生の一團を糾合して之れに佛敎的思想を注入し又は明敎新誌を始め其他著名なる佛敎雜誌に特別寄書家として名論卓說を寄せ又は

俗人の爲めに佛教を平易に說き之を刊行し之を印施して大に奉佛の勝緣を結ばしむ一介の書生を以て其事業の先輩を壓倒すること此の如し知らず先輩にして宗門に微功なきもの師に對して慚死する所なきや否や至竟師や一介の老書生を以て視るべからず須らく一流の碩德高僧として大に推重を加へざるべからざるなり

筒川方外師（但馬國養父郡宿南村宗恩寺住職）

若し漢籍に精通するものを擧げ來らば宗門師の上流に立つもの稀れなるべし若し餘乘に熟達するものを擧げ來らば宗門又師の上流に立つもの稀なるべし實に漢學は師に於て第一の長處餘乘は師に於て第二の長處之に加ふるに宗乘自在にして隨處光を放ち詞藻富麗にして咳唾珠を綴るを以てす其學其才既に宗門に冠たり而かも其人山林に韜味して出でず其名亦徒らに白雲の封ずる所と爲る斥鷃一輩の居士

固より以て大鵬の壯圖を窺ふに足らずと雖も若し居士の信ずる所をして甚しき差異なからしめば師が今日の韜味は或は異日雄飛の素を養ふにあらざるなきか大に飛ばんと欲するものは大に翼を斂む師の謂にあらずして何ぞや

師少小にして漢籍を鴻儒池田氏の塾に學び經史に於て大に發明する所あり尋で餘乘を狩野白堂居士に學ぶ白堂居士聘せられて三州豐川の妙嚴寺に赴くに及び錫を轉じて西都に遊び爾來七八年手卷を釋かず或は台部を三井に學び或は唯識を泉山に問ひ綿密の用意を以て苦學是れ勵む今日漢學に於て又は餘乘に於て宗門に匹敵するもの少なきは全く此の如き學歷を有するが爲めのみ豈に一夜漬的の學者と日を同ふして論ずべけんや

師嘗て曹洞宗大學林教授の任を帶びて漢學を林生に授く然れども是

れ其志にあらざるなり師の志豈に區々一漢學教授の任にあらんや故を以て幾もなふして之を辭せり今や故山に歸臥して復人間に出でず其志大に異日に待つものあるにあらずんば安んぞ此の如きを得んや嗚呼滔々たる宗門多くは佛法の請賈を業とするものゝみ此間に於て師の如き眞個の學者を見る恰も「サワラ」の大沙漠中に「オーシス」を見るの感あり師よ異日の爲め驚くは自愛せよ

南木國定師（越後國南魚沼郡雲洞庵住職）

宗學の大家を以て現時肩を西有穆山師と齊ふし南北對峙して頡頏相下らざるものを駒込學寮出身の大學者南木國定師と爲す

師の一大長處は宗學に在ること敢て居士の喋々賞讃するを竢たざる所なり此の如き一大長處を有して而して徒らに北越の山中に臥す豈に年齒七十七以て後進薫陶の任に堪へざるに由るか抑も浮薄の俗遂に師の如き剛直の人を容るゝ能はざるに由るか然らざれば身無價の珍寶を抱ひて空しく白雲遮斷の山中に閑臥す宗門幾多の志士知らず阿誰を盟主として宗風の勃興を謀らんや西駿に西有穆山師あり北越に師あり而して二老俱に出でざること此の如し宗門の爲め居士切に惜みて止まざるなり

師戒行高潔にして自から持すること尤も嚴なり故に師の嘗て曹洞宗大學林に教師として在勤するや林生の放縱羈勒すべからざる輩と雖も師を憚りて自から戒む然り而して習慣は第二の天性と成り之を久ふして遂に品行方正の人と爲る師の人を感化すること實に此の如きものあり君子の德鳴呼何ぞ至大なる

今や宗門宗學に於ては西有穆山師と南北相對して恰も角技に於ける東西の大關の如し況んや既往四十年間師が教學二途に盡したる大勳

偉蹟は日月と共に光を爭ふものあるをや而かも師遂に白雲を出づるに意なきが如きは何ぞや漢庭築巧宦雲客踈邊功の感居士師に於て特に深し矣

成川百衲師（豐後國東國東郡豐崎村泉福寺前住職）

定力あるもの未だ必ずしも學力あるもの亦未だ必ずしも定力あらず此二者を具備して應用自在なるもの夫れ唯我が成川百衲師か

師若冠にして行脚し洽く天下の名師巨匠を訪ふ此間の精勵刻苦禿毫の能く盡くす所にあらず而かも霜辛雪苦を嘗め盡くしたる梅花は春風に逢ふて萬斛の清香を吐くが如く師は此多年の精勵刻苦に由りて豁然として大悟し遂に了事衲僧消一個長連牀上仲脚眠の好境遇に達するを得たり謂ゆる古人刻苦光明必ず盛大なるもの居士師に於て乎

始めて之を見る

師定力に於て既に得る處あり而かも倘休し去らず此より心を潜めて萬巻の書を讀破し以て古鏡照心す故を以て學力亦非凡なり之を今の辛ふして曹洞宗大學林を卒業し成規の日子を本山の僧堂に斷送し一片の告身を携へ歸りて揚々碩德を以て自から驕るものに比す固より肩を比して議すべきにあらざるなり

定力あり學力あるもの多くは辯才を有せず而かも師は然らず定力學力を有して而して兼て辯才無礙なり既往四十年間能辯の大説敎師として雷名を天下に轟かしたる所以なり

師性行瀟灑磊落禪者たるに負かず而して皇典に精通し兼て俳句を能くす湛水の名俳人社會に嘖々たり之を聞く師が俳句の妙は全く禪に由りて悟得せりと其絶妙尋常俳人の企て及ぶ所にあらざる亦宜なら

ずや

師今や泉福寺を織田雪巖師に付して閑居し日夕風月と相親しむ風月若し心あらば未だ必ずしも師が既往四十年來宗門に盡したる大勲偉蹟を追懐して深く師が老境を慰めずんばあらず好個の元老居士潜かに其福壽無量を禱る久し矣

村山泰音師（能登國鳳至郡櫛比村芳春院住職）

文章の事業に於けるは猶花の實に於けるが如きか苟も實なくんば則ち其花姿態絶妙を盡くすと雖も徒らに人目を悦ばしむるに過ざるなり實に於て何の補かあらん文章の事業に於ける其趣亦之れと異らず則ち文章如何に巧妙なりと雖も苟も事業の見るべきものなくんば其文復何の取る所あらんや

師は文章の大家を以て夙に英名を宗門の内外に馳せたる人なり其思

想の縝密にして而して用意の周到なるや其文章亦之に副ふて縝密周到なり故に或は一瀉千里の偉觀を缺くの憾なきにあらずと雖も水科に盈ちて始めて流るゝの綿密に至りては近時文章を以て家に名くるものゝ中に於て罕れに見る所たり然れども居士の師を取る豈區々文章の末技に在らんや

居士は大に師の事業に推服するものなり師の盛名を棄てゝ實行を期するや殊更に瘦我慢を張りて獨力事業を擧げず故に既往に於ける師の事業は唯日本法教獨立會の一種に止まると雖も師が先輩諸師を輔けて其志を成さしめ而して之れと同時に己れの事業を樹立したることは擧けて算ふべからず今や師は大本山總持寺東京出張所副監院の顯職に在りて公には石川、大徹の兩監院と力を協はせ私には在田、安達の諸先輩を輔けて分離問題の要衝に當り日夕畔上總持寺貫首の帷幄

に在りて樞機に參ず形勢未だ定まらず是を以て分離獨立の成敗未だ
トするに由なしと雖も兎に角師が事業に於ける人の想ひ到らざる處
に於て此の如く光明を放つ則ち其文章燦々として英華を吐く亦何を
か怪まんや

師若冠にして故不二門眉栢師に泉の紅谷に參じ後奕堂、悟由の諸老宿
に歴侍す故に其造詣極めて深し學成るに迨んで厚く故三芳能山盟院
の信任を受け其命を奉じて嘗て一代藏經を取調べたることあり後曹
洞宗務局に入りて洞上行持軌範編製の書記となり尋で明教社の聘に
應じ明教新誌に主筆として佛門の警鐘たり著はす所栴崖芳話、立教大
論、洞上高僧紀年等あり而して彼の革新論の大册亦師の椽筆に成れり
と云ふ

之を要するに師は固より文章の大家たるに相違なし而かも其事業の
偉大なること此の如し乃ち師や尋常一樣の文章家を以て視るべからざるなり

上野瓶城師（肥前國北松浦郡山口村洪總寺住職）

紀綱察は宗門維持の財源たる三十萬圓の基本財産を管理する處之れに察司たり副司たるものは固より謹直一途の尊宿たらざるべからず彼の權變機略に富み經濟社會の狀況を偵察し金銀貨の變動を豫知して之れに應ずるの略を運らし以て錙銖の利を爭ふが如きは俗人の事なり僧家殊に紀綱察に察司たり副司たるべき尊宿の得て爲すべき處にあらざるなり

師は宗門上下の信任を受けて紀綱察副司の職に在るものなり其謹直一途の人たるや固より言を俟たざるなり既に謹直一途の人を以て察司北野元峰師を輔けて察務に執掌し三十萬圓の基本財産を管理し雨

山分合問題の中間に介立して秋毫も侵されず謹直一途の人にあらずんば決して此の如きを得ず師又說敎に巧にして九州に在りては名聲を山中相音師と丶もに相馳す故に人師が說敎の名家を以て紀綱寮の俗務に執掌するを見て奇異の想を抱くものなきにあらずと雖も宗門經濟の事たる若し其衝に當りて之を處理するものなくんば宗門の維持知らず如何なる方法に依りて其目的を達することを得んや由是觀之身を挺して宗門經濟の要衝に當るは菩薩の事なり書生論を妄張するものゝ固より知る所にあらず乃ち師や說敎の名家として說敎に努めざるべからざるのみならず之れと同時に紀綱寮に副司として亦宗門經濟の要衝に當らざるべからず師の任實に重しと謂つべし

上田祥山師（丹波國氷上郡乙河内村臨川寺住職）

其寺數を問へば則ち一萬四千其僧數を問へば則ち二萬有餘形骸に於

て固より矮小と謂ふべからず而かも此の如き尨然たる一大宗門にして精神の衰弱或は見るに忍びざるものあらんとす居士曹洞宗の爲め切に惜まざるを得ず

曹洞宗大學林出身者（舊曹洞宗專門本校出身者をも含む）の數現今に於て既に六百有餘名の多きに達せりと聞く大學林出身者の數年々に增殖し來るは宗門の慶事として居士固より之を賀せざるを得ず然れども此增殖を以て直ちに宗門の精神衰弱を醫治し得べしと爲すが如きは大早計の譏を免るゝものにあらず今夫れ大學林を卒業し本山の僧堂に掛錫して成規の年限を經成規の手續に依りて證明狀を得たるもの宗門之を稱して碩德と云ふ之を碩德と云ふ固より不可を見ず何となれば凡そ碩德なるものは必ずしも心事了畢のものゝみを指すの稱號にあらざるを以てなり謂ゆる碩德にして尙心事未了のものある此

の如し況んや大學林尋常出身の躍をや苟も宗門精神の醫治は一に禪定を勃興せしむるに在ること了得せば頑徒及び大學林出身者を以て一例に宗門精神の衰弱を醫治するに不適任なりと云ふべからず雖も亦之を以て一例に適任なりと斷定することを得ず究竟宗門精神の衰弱は一に禪定と稱する一種の藥劑を以てするにあらざれば到底其目的を達するに由なきが故に身醫治の任に當るべきものは須らく眞個大事了畢の衲僧たらざるべからず彼の儀式的の稱號を招牌とし て舌頭徒らに佛法を簸弄するもの、如きは固より儀式的の適任者のみ決して眞正の適任者にあらざるなり

師は臨川前住古同和尚の令嗣なり少小にして漢籍を修め衆て餘乘を攻む日置默仙師御油の圓通寺に據り大に雲衲を接するとき聞き陳篇を拋ちて徑に其門に趨り困丈に追隨して刻苦心要を

究む仙師頗る其才を愛し之を策勵して倦まず故を以て師の業著しく進む適ま某禪人なるものあり其師命を奉じ來りて仙師の門下に投ず師之れと一見恰も舊識の如し於是乎之れと刎頸の交を訂じ日夕相會して心要を商量す禪人嘗て相國獨園翁の門下に在りて其毒手を喫したるものなり故を以て頻りに心要の研究臨濟の僧堂に過ぐるものなきを說く而して師も亦大に感奮する所あり於是乎一禪客と、もに仙師の門下を辭して越溪老和尚を但馬の僧堂に訪ひ錫を留めて其提撕を蒙むることと數年越溪老和尚の滅度を示すに迨び錫を洛西の妙心僧堂に轉じて虎關老和尚の門に遊び或は相國を訪ふて獨園老和尚に參じ尋で禾山老和尚に豫州八幡濱に參じ十度の星霜を閱みして漸く大事を了畢せり其間嘗むる所の辛酸果して如何ぞや今や錙銖の築を擔ふて宗門に歸り更に仙師に隨ふて尙研磨を廢せず餘力を以て仙師を

輔け可睡に後堂として大衆を提撕す常に人に語りて云く吾を刺撃して濟北行脚の志を發せしめたるものは某禪人也吾を扶助して十年濟北に在るの間專一に己事を究明することを得せしめたるものは獣仙老師也吾をして珠を驪龍頷下に得せしめたるものは禾山老師也と是を以て赤心を傾注して仙師を輔弼す澆季の世眞に獲易からざる君子と謂つべし

師年紀僅かに而立を過ぐ而かも其伎倆に至りては居士師が能く宗門精神の衰弱を醫治するに堪へたるを知る唯一事未穩在のものあり何ぞや師が年少氣鋭動もすれば世路の風波を顧みず一氣呵成的に宗門精神の衰弱を醫治せんと欲するに在り願ふに宗門精神の衰弱一日の故にあらず之を醫治せんと欲す豈に成を一日に期すべけんや嗚呼誰か宗門の黄石公たるものぞ居士は汝に因りて斯人の忍耐を試みんこ

とを欲す

宇野玄機師（丹後國與謝郡宮津町智源寺住職）

易に云く言行は君子の樞機と宜なる哉言や苟も言其行と相合せず則ち如何に深遠の理を談じ如何に巧妙の辭を弄すと雖も鴉鳴雀噪と何ぞ擇ばんや定力佛徒に於て一日も無かるべからず學力佛徒に於て亦一日も無かるべからず而かも定慧を備へて戒行を缺くは即ち實に言を備へて行を缺くものなり行解相應之れを眞の佛徒と云ふ已むなくんば解或ひは缺くも妨げずと雖も行は遂に缺くべからざれば則ち今の解を備へて行を缺くものは眞の佛徒にあらず之を鴉鳴雀噪の徒と云ふ固より不可なし

師は故藤井光全師と共に奇雲門下の二哲と稱せられ見性前住故百谷奇雲老師の門下に於て嘗て出藍の譽を博したる人なり故に其定力

に於ては奇雲老師の眞髓を得若冠にして禪名既に叢林に嘖々たり奇雲老師化を戢むるに迨びて敎部を台門の諸老宿に學び遂に其堂奥に陞る之れに加ふるに戒行高潔殆んど人に絶するを以てす好個の白璧一點の微瑕を見ず居士如何ぞ隨喜渇仰の涙を師に濺がざらんや是れ居士が師に陸原の二師を加へて山陰の三傑なりとし未來貫首の寶冠師等三傑の頭上に墜ち來ることを信じて疑はざる所以なり

師既に戒定慧の三學を具備して白璧一點の微瑕を留めず故を以て畔上總持寺貫首は特に信任を師に置き嘗て師を擧げて能山前堂の後堂に任ず師年齒僅かに三十七八而かも宗門中尤も名譽ある後堂の大任を拜し西堂を輔けて龍象を陶冶す戒定慧の三學人に絶するものあるにあらずんば何を以てか此の如きを得んや

居士は特に師に推服するもの何ぞや師が毫末も貪名愛利の妄念

なきこと是れなり兩山分合の問題一時喧囂を極めて兩派の紛爭方に關なる時に當り師は冷然之を看過して敢て意に介せず只孜々として徒に敎ゆ以て名利の念毫末も胸海に湧かざるを見るべし居士又更に師に敬服するものあり何ぞや師が平生の擧措甚だ古人に遁れること是れなり其寺門に在るや弊衲破袈裟然として古道を行ひ其寺門を出づるや網代笠を戴き頭陀袋を携へて嘗て時樣を追はず師の如きは眞に宗門行持の模範として厚く門閭に表旌するも可なり

宇野默音師（美濃國岐阜市本覺寺住職）

其言辭は清爽にして流暢なり其擧措は敏活にして巧妙なり謂ゆる口も八町手も八町なる者居士師に於て乎始めて之を見る

師は曹洞宗大學林出身者の一人にして夙に能辯を以て一家を爲すものなり故に師が既往の事業其四分の三は言辭に關するものと云ふも

可なり之に加ふるに宗門の時務に通じ兼て胸中百萬の甲兵を藏すを以てす故に一たび公衆の面前に於て得意の能辯を揮ふや言辭と論旨と俱に絶妙の域に在るを以て拍手喝采の聲轟々として滿堂を撼動すと雖も蘇張の辯良平の智を併せ有するにあらずんば決して此の如くなるを得ず

嘗て有志會なる一團の大阪に起りて當時の管長に還るや其發動の主機は果して何人の手に在りしや居士の如き門外漢に在りては今日に於て尚模索不着なり然れども當時師が主機の一分を握りつゐありしことは最早疑ふべからざるなり師が自坊なる本覺寺の尸羅會には有安老人戒師として赴化し關西志士の粋なるもの亦概ね來りて隨喜せり故に或者は本覺寺を以て有志會の鹿ヶ谷なりと評せしは時に取りての一興なりし而して師俊寛僧都の任に在りて百方謀策に努め曾に

有志會をして失脚に至らしめざりしのみならず己れ亦「見せばやな」れと思ふ人もあらん只ひとり住むれいしは天晴れの智者と云ふべし

師又前衆議院議員天野若圓氏と相謀りて愛國協會を岐阜に設立し或は新聞紙を發刊し或は雜誌を發行して青皇率佛の大義を唱道し現時尚身を委して其擴充に淬勵せり嗚呼師や實に宗門の快丈夫と謂つべきなり

上田大法師（北海道渡島國函館浩高龍寺住職）

函館は佛敎北門の鎖鑰なり之を守る者若し其人を得ずんば忽にして敵の蹂躙する所と爲らん而して北海道開敎の途於是乎絶へざるを得ず

露敎の涎を北海道に垂るゝや久し彼れ北海道を略するの捷徑は（勿論

宗教上の北海道也函館に據るに在るを悟り教徒の敏腕なるものを撰みて茲に駐劄せしむること殆んど三十年未だ好結果を收むるに至らざるも侮りて前途恐るゝに足らずと爲すは非なり組合、浸禮、美以（メソヂスト）美諸派の如き亦其着眼露骨と甚だ異るなく羽林虎賁の勇を皷して茲に陣す一旦佛教の隙あるを偵知せんか彼れ一擧鎖鑰を奪はずんば已まず函館を守るの任其人を得るに難き所以上田大法師が宗門に於て果して函館の太守を以て自任し居るや否や居士の知る所にあらず然れども師が學問品行閲歴等の上に就て公平に之を論せば居士は師が宗門の函館太守として慥かに其價直あることを信ず否當に居士のみにあらず苟も師を知り及び函館と宗門との關係を知るものは何人も師を以て宗門の函館太守と認めざるは少なからん然り而して其此の如く認むる所以は師が嘗て吉祥教會を組織し又は吉祥女學校を開設して全力を破邪顯正の事業に盡せしを以てなり師の任亦重しと謂つべきなり

師天資温厚にして宛然古仁人の風あり而して學問品行俱に人に絶す宗門函館の太守として不可なき所以

能仁義道師（信濃國北安曇郡大澤寺住職）

僧家の天職は衆生濟度に在ること固より居士の言を俟たざるなり而して衆生の根機既に千差萬別なる以上は之に對する濟度上の手段亦千差萬別ならざるを得ず然れども謂ゆる千差萬別の手段中最大必要にして而して功を奏すること最大迅速なるものは說教に過ぎたるはなし苟も僧家にして此術に巧ならんか活如來の稱號を得て宗門の版圖を擴充すること敢て甚しき困難を見ざるなり是れ眞宗、淨土宗等の今日の旺盛を致したる所以にして而して爾餘各宗門の衰頽遂に今日

の極に至りたる所以なり

徳川氏大政を奉還して天下の局面其一轉を見るに至るや教門の形勢亦從つて一變し益々檀信徒の歸嚮を維持せざるべからざる必要を生じ來りたれば全國到る處俄かに說敎練習者を見ざるなきに至れり此時に當り師は絶倫の才を以て懸河の辯を揮ひ以て弘敎の偉勳を策す故を以て師は德山了古師と南北對峙して說敎大家の英名を博し就て說敎の秘訣を問ふもの多し天成の才辯人に絶するものあるに由ると雖も抑も亦先見の明炬よりも大なるものあるにあらずんば安んぞ此くの如きを得んや

師天資温雅にして人と爭ふことを欲せず故を以て交遊の者頗る多し說敎の大家交際の好手として稱賛絶へざる所以歟

久我篤立師（三河國渥美郡豐橋町龍拈寺住職）

豐橋の龍拈寺は當恒會格にして門地頗る高し而かも師は若齡を以て其法席を蓋し能く寺門を治め能く檀信を化して人境相應の稱賛を博す苟も非凡の伎倆を有するにあらずんば安んぞ此の如きを得んや

師は少小にして錫を加北の天德院に掛け久しく森田悟由禪師に侍して其提撕を蒙むりたる人なり尋で錫を東都に移して專門本校の自費寮に入り後同寮より出でゝ專門本校に入り非常の好成績を以て同校を卒業す故に普通の學問に通じ宗學の如きは尤も其長處なりと云ふ幾もなふして當寺に昇住し昇住以來年處を閲するの多きにかゝわらず當て一回の失敗を取りたることなく遂に人境相應の稱賛を博するに至れり

師天性謹直苟も自から侮らず故を以て人師を敬せざるはなし而して其品行は方正其交際は巧妙其德望は盛大なり師既に此三者を具して

當寺に視察す人境相應の稱賛を博する豈に偶然ならんや

山中相音師（肥前國杵島郡須古村陽興寺住職）

石川素童、市川東崖、西川象山之れを良範門下の三川と云ふ而して三川皆俊才を以て夙に宗門の望を負ふ者市川東崖師不幸短命にして逝くと雖も尚二川を留めて宗門を粧點せり大寂定中の良範老師にして知るあらば願ふに寸毫の遺憾なからんか

山中艮音師亦良範門下の俊才を以て嶷然頭角を宗門に顯はしたるものなり而して師は特に其令徒として大法を故艮範老師に嗣承したるものなり故に其性行より以て風采に至る一として故老師に彷彿たらざるはなし居士が平生故老師の遺れ紀念を以て師を視る豈不可ならんや

師既に近代の巨匠故艮範老師の令嗣たり乃ち其一身に於て特殊の技

能なからざるを得ず知らず師の特技は果して何物に在るか禪定か學問か抑も亦布敎か

師が既に故良範老師の令嗣たる以上は師に定力あるは固より居士の言を竢たざる所なるべし然れども之を以て師の特技と爲すは未だ師を知らざるの致す所なり然らば則ち學問に在るかと云ふに師が普通に學力を有することは何人も認むる所なりと雖も之を以て師の特技と爲すは亦未だ師を知らざるものなり若し宗門の公論に從ひて師を品せば師の特技は實に說敎に絶妙なるに在り師が一たび法座に陞りて大敎を宣說するや滿座闃として聲なく唯隨喜渴仰の淚嗚咽の聲に和して滿たるのみ故を以て感化の功尋常說敎師の能く及ぶ所にあらず乃ち師や越の德山了古師、信の能仁義道師等と相須ちて宗門布敎の實權を握ると云ふも可なり師夫れ奮はざるべけんや

山腰天鏡師（因幡國八東郡若櫻村龍德寺住職）

茶褐色なる其眼白晳なる其顔魁梧奇偉なる其姿早く既に非凡の人物たることを證明して餘ふ所なし專門本校出身者中の尤物として名聲宗門に嘖々たる所以か

師が專門本校出身後の閱歷は頗る多し而して畔上總持寺貫首の地方巡化に隨行したるが如き專門支校に育英の職を執りしが如き有澤香港師設立の大坂協立學校に倫理科敎授として英學書生に佛敎の倫理を授けしが如き曹洞宗大學林に學監たりしが如き列擧し來れば指僕ふに遑あらざるなり要するに其閱歷の多き大學林出身者中居士未だ其比を見ざるなり

師天資温厚にして宛然長者の風采を備ふ故を以て人皆師に推服して師を重んずること厚し況んや深博なる宗學流暢なる言辭綿密なる品

行を以て化を遠邇に宣ぶるをや其身山陰に在りて其名宗門に嘖々たる所以か亦一流の高僧なり

町元呑空師（加賀國金澤市寶圓寺住職）

莊周云く名は實の賓なりと師既に呑空を以て名とす其腹中の廣濶なること以て知るべきなり

師の腹中果して廣濶なるか然らば其容るゝ所は何物ぞ居士の見る所を以てすれば其腹中に於て首座を占むるものは餘乘ならんか而して宗乘之に亞ぎ漢學亦之に亞ぐこと敢て讀心術を俟ちて後知らざるなり

師は專門本校出身者の一人にして夙に才名を四方に馳せたるものなり故に晝錦の榮を擔ひて輪島の蓮光寺に晋院するや掌を側てゝ彈丸を受くるに似たる半島早く既に師の才名に壓せられて復一人の頑頗

するものなきに至る此時に當りて師は旭日東天の勢を以て縱横志を行ふ然れども喬々たる珍木の頂金丸の怖なきを得んや遂に事に依りて失脚し身を行雲流水に托するの已むなきに至れり

師の西都に在りて知恩院に投し餘乘を攻むるの傍著作に從事し以て著述家の名を轟かしたるは實に蓮光寺の失脚後に在りし而して之に依りて餘乘の蘊底を盡くし之に依りて著述家の名を馳せ以て金澤三刹の一なる寶圓寺の請に應じて其法席を董すことを得乃ち蓮光寺の失脚は師に於て榮達の一階たりと謂つべし

今や師加北に在りて北陸布教の實權を占む前途實に多望なる哉其著はす所の書極めて多し而して皆修學の便を後進に與ふるものなり後進の恩を師に負ふ抑も亦深い哉

福山默童師（三河國寶飯郡豐川妙嚴寺住職）

宗門の廣き僧衆の多き或は學識汪洋なるものあり或は操行潔白なるものあり或は識見高邁なるものあり或は胸襟空濶なるものあり而かも此四德を具して人に驕らず恭謙自から守る謂ゆる良賈は深く藏して虛きが如く君子は盛德あつて容貌愚なるが如き者居士我が妙嚴寺住職福山默童師に於て乎之を見る

師は奕堂門下の一秀才にして久しく其提撕を蒙むりたる人なり故を以て妙嚴寺の富饒宗門に冠絕し而して其生活の度亦幕府時代に於ける五十萬石の諸侯を壓するにもかゝわらず節儉力行を以て下を御し淨財の剩餘を擧げて悉く教學の資に充つ妙嚴寺の日一日よりも旺盛に赴くは咤呎呢尊天の威靈に賴ること固より疑ふべからずと雖も抑も亦師が儉素自から奉じ餘貲を投じて教學の擴張に力を盡すにあらずんば何を以てか此の如きを得んや

師が半生の事業錄して宗門の典型に充つべきもの少しとせず殊に師が半生の閲歷自利利他の二途に在りし如きは尤も宗門一般の稱贊して已まざる所なり試に其一例を擧ぐれば明治八年師が先師の箕裘を承けて妙嚴寺の法席を董すや法務の繁忙す隙も容易に得がたきに拘らず宗乘餘乘漢學等の專門學者を聘して敎師と爲し苟も閑暇あらんか則ち衆僧を率ひて講筵を開き敎師に命じて宗乘餘乘漢學等の學科を敎授せしめ而して師の宏才博識を以て尙其講筵に列し其講說する所を聞きて自から資けたりき以て師が自利利他の事業に於ける其一斑を窺ふに足る

師又宗門の經綸に於て特殊の識見を有す故に嘗て曹洞宗大學林に總監として學政を執り尋で大本山永平寺に監院として宗政の要衝に立ち樹立する所の功勳頗る多し其宗門の大事に臨みて心決せざる所あるや三日五日臥して推敲するを例とす亦祖門の良相なり

師人と爲り忍耐に強く而して能く人を容る故に門下の諸生師を慕ふこと父母の如し此心を以て嘗て本山の貫首を輔弼す祖門の良相とて末派の崇敬を受けたる所以

古田梵仙師（信濃國東筑摩郡波多村盛泉寺住職）

眼に一丁字なき盲漢は敢て論ぜず苟も宗門に在りて多少の敎育を受け多少の典籍に眼を晒したるものは何人か古田梵仙の名を記臆に印せざらんや

師は宗門に於て敎育家と著述家とを兼ねたるものなり而して其著述に在りては事皆大中小學林の敎科書に訓詁評釋を加へたるものに係るを以て冥々の間宗門敎育の普及を助けたること擧げて算ふべからず故に或人居士に語りて曰く今の大學林を卒業し碩德の證明狀を得

て名聲を宗門に馳する者其十中の七八は皆地方學林に在る時師の傍註ある教科書に縋りて苦學したる輩のみと言稍々奇矯に失すと雖も亦敢て事實に背反したる言と爲すべからず

師が宗門の教育に對し間接に樹てたる殊勳炳乎として掩ふべからざること此の如し若し夫れ直接に樹てたる功勳に至りては間接に樹てたる殊勳に對し多少遜色あるを免れずと雖も宗門の教育倘幼稚なり し時代に於て師が駒込なる專門本校に教師として銳意教授の任に當り以て教育の典型を地方支校に與へたるが如き其功勳決して偉大ならずと云ふべからず唯之を師が宗門の教育上間接に樹てたる殊勳に較して稍々遜色あるのみ師が宗門の教育に對する勳業嗚呼何ぞ偉大なる

師天資綿密にして品行方正なり唯言辭に於て稍々艱澁を免れず是れ

を白璧の微瑕と爲す然れども其宗乘に熟達し漢學に精通するに至りては諸碩德中罕れに見る處今や年齒六旬に垂んとして尙情を教育に絕つこと能はず靜岡縣第一號曹洞宗中學林に漢學教師として後進を薫陶す顧ふに一箇の菩薩師に於て其樂王公にも換へがたきものあらんか乃ち師の殊勳之を宗史に錄し百世に傳へて可なり

藤原良宗師（羽前國鮑海郡遊佐村安養寺住職）

宗門の自治を末派に許すや久し乃ち理宜しく不羈獨立の心を以て此恩賚を全ふせざるべからず而かも一事一物總べて中央政府たる曹洞宗務局の鼻息を窺ひ其干渉を受けて僅かに自治の資を塞ぐもの地方取締副取締中に多きは何事ぞ願ふに卑屈の念曹洞宗務局の權威に避易し一意恭順唯其干渉を受けて勉めて過失なからんことを期するに在るは疑なしと雖も抑も胸中事務的別才を有せざること其主因たら

おんばからず

宗門從來の弊取締副取締等の撰擧に際し徒らに情實に纏綿し管内の利害を度外に拋擲して格地小本寺の住職を擧げて地方宗務を視せしむるも彼等は宗務在り格地小本寺等尤も門地の崇なるものを擧ぐるに上何等の處分をも施す能はず故に猾なるものは媚を曹洞宗務局に獻じて其干渉を遮へ愚なるものは部下の群小に依賴して遂に茶毒を管内に流すを斷ずるに他なし格地小本寺の住職には道人的人物多くして胸中事務的別才を有するもの少し自治の名存して自治の實見るべからざる所以か

師天性敏慧事務に於て別才を有す嘗て叢中會なる一團の東京に興るや師其幹事を以て内會務を整理し外同盟會に當る今や山形縣第三號宗務支局に副取締として地方宗務に執掌し一意管内寺院の幸福を增進して自治の政治を全ふせんことを努む故に其聲望頗る隆ふして而して勢力亦強大なり副取締此の如き人を得て始めて地方に於ける自治の政治を全ふすることを得んか師又宗乘普通學等に通じ而して數學の如きは尤も其長處なりと云ふ特に胸襟洒落之と相語る恰も光風霽月に對するの想あり亦一個の快丈夫と謂つべし

古知知常師（伊豆國君澤郡修善寺村修善寺住職）

故海藏月潭老師は一代の巨匠たり故を以て其門下俊傑を出すこと少しとせず有安老人等其一人なり特り嗣法の弟子にして老師の嗣子たるに堪へたるものに至りては古知知常師只一人あるのみ謂ゆる賢父に肖ふして父に半德を減ず賢父に過ぎて方さに倚授するに堪へたるもの居士師と老師とに於て之を見る

世上の弊學問あるものは品行方正なるものは學問乏き

に在り放に醫者の不養生學者の不品行を以て殆んど一種の通則と爲すものゝ如し殊に宗門に在りて稍學問あり禪定あるものは往々破大乘の妄見を起し甚しきは大用現前規則を存せずと唱へ放辟邪侈殆んど見るに忍びざる醜行を爲すものあり此間に處して其汚氣に汚さゝるなく操行潔白能く古道を踐む師の如きは實に群雞の一鶴と謂つべき歟

師深博の學識と老練の手腕と潔白の操行とを以て今や曹洞宗大學林に教頭たり而して能く意氣霄漢を摩するの勢ある林生を御して學に勵み業に努めしむ月潭老師の令嗣たるに負かずと謂つべし

師天資豪膽能く人の爲し得ざる處を爲す而して尤も僧風の日々に頽廢に就くを慨す大政維新の際政府僧家に令して苗字を稱せしむ師甚だ快と爲さず乃ち官衙に告ぐるに苗字を佛敵に定め佛敵知常と稱せ

んことを以てす官衙其激に失するを以て之を肯んぜず師乃ち佛敵に代るに古知を以てす官尊民卑の風尤も隆盛なる當時に於て師が官衙に對するの所爲此の如し以て其豪膽の一斑を見るべし況んや佛敵の二字無量の感慨を寓するをや師が當時に於ける感慨以て察すべきなり

小松萬宗師（北海道石狩國札幌區南一條中央寺住職）

宗門の「クライブ」を以て自任し夙に北海道に赴錫し遂に札幌に中央寺を新建し身之れに住職して北海道布敎の樞機を握る小松萬宗師の如きは能く其自任を全ふするものと謂つべし

赤手を以てせば一把の茅舍を新建することと尙人の難しとする所而かも師が赤手北海道に入り衆望を收めて遂に輪奐美を盡したる新寺を建立す人に紹するの伎倆あるにあらずんば何を以てか此の如きを得

んや

抑も居士は嘗て師に疑ふ所あり以爲らく師何の長處を有して此の如く衆望を收め此の如く不知案内の境に入りて新寺を建立することを得たるかと而して其人に接し其爲す所を見るに及んで其資性の温厚篤實なる啻に赤心を以て人に推すのみならず事理に明晰なる交際に巧妙なる布教に堪能なる固より常人の企て及ばざるものあり居士於是乎夙昔の疑團一時に冰消し嘆じて曰く因なきもの決して果を生せず師既に此因あり此果遂になからざるを得ずと宜なり矣北門の蒼生師を慕ふこと厚く遂に師をして新寺を建立することを得せしめたるや

師今や北海道第一號曹洞宗務支局に取締として地方長官的の地位に立ち北門開教の計畫に從ふ唯平生滿を避けて損に居る是を以て中央

寺新建の餘に於て未だ赫々の偉業あるを聞かず嗚呼亦智者の智者たる所以歟

近藤踈賢師（尾張國西春日井郡杉村久國寺住職）

俚諺に曰く山椒は小粒でもヒリヽと辛いと豈近藤踈賢師の謂にあらずや而して其生平任俠の行爲燕趙飛歌士、相逢劇孟家、寸心言不盡、前路日將斜の概あるに至りては宗門何人か能く師に及ぶべきものぞ

師の長處は學問に在るか禪定に在るか將た道德に在るか抑も辯才にあるかは居士の未だ悉さゞる所なり然れども師が愛國護法の志熱して火の如く物に觸れて忽ち發動するが如きは宗門中居士の未だ多く見るを得ざる所なり斗大の膽によりて此赤誠を盡す師の名師の事業どゝもに一世に高き所以然り而して毫末も報償を求むるの意なきは尤も常人の及びがたき所と爲す岳武穆嘗て虔吉の群盜を平らげ道新

塗に出づ其青泥市の寺壁に題して雄氣堂々貫斗牛、掃將異節報君讐、斬除頑惡還車駕、不問登壇萬戶侯と云ふに至つて居士未だ嘗て武穆平生の志に感せずんばあらず而して師が平生の志恰も武穆と相似たるものあり居士安んぞ師を以て宗門の武穆と稱せざるを得んや

師年齒漸く而立に達すと雖も既往十餘年金城に在りて破邪顯正の事業に淬勵し生命を賭して愛國護法の責を盡し宗門の名古屋鎭台を以て自任す其豪膽安んぞ驚かざるべけんや

江西芳洲師（肥前國西彼杵郡深堀村菩提寺住職）

其風采は堂々其聲望は赫々而して九州寺院に牛耳を執り隱然宗門に一敵國たり江西芳洲師の如きは實に祖門の俊豪と謂ふべき歟

明治二十五年三月十九日畔上能本山貫首の能本山分離を宣言し能本山の系統に屬する寺院に令して分離を遂行せしめんとするや九州寺

院の多數は之を以て宗門百年の長計とし所在競ひ起りて分離派に應ず此時に當りて師は兩本山の分立を以て大に兩祖の本懷に戻るものとし群議を排して兩本山分立の不可を唱ふ故に當時師を以て宗門の顏眞卿と呼ぶものあるに至る曹洞宗兩本山非分離同志會なるもの東京に起るに迨び師を仰ぎて其領袖と爲し同會幾千の寺院師の力に訴へて兩本山併立制度を維持せんとす忠肝義膽一世を壓倒するものあるにあらずんば何を以てか此の如きを得んや

抑も四谷怪談を聞きて腰を拔かし蜂蚋に逼られて援を求む禪僧の怯懦柔弱今日に極に陷るや而かも師は斗大の肝膽を以て一世を瞰下し幾多の敵勢を視ること猶一團の螢火に對するが如く談笑の間幕下に指揮して之と戰ふ然り而して其智略亦膽力と多く相遜らざるものあり故を以て非分離派の寺院は一に師に倚頼して孳々布敎に努むと

云ふ

師天資重厚なり故を以て容易に動かず然りと雖も其一たび信じて自から動くや必ず目的を達せずんば已まず現時長崎縣の曹洞宗務支局に取締として尚非分離派の牛耳を握り死を以て分離派の討滅に從ふ嗚呼亦天資重厚の致す所か越本山の周勃冀くは自愛せよ

江崎接航師（對馬國下縣郡殿原國分寺住職）

對馬は我に於て眞に滄海の一粟たるに過ざるのみ而かも二十に滿たざる寺院を以て木強御し易からず嘗て曹洞宗務局に抗して放恣大機師の派遣せられしを見る手腕の敏活人に絶するものあるにあらずんば其分局に取締として此輩木強寺院を御し夫れをして滿足を得せしむることを得んや

師は故白鳥鼎三老師の門生にして久しく採薪汲水の功を其門下に積

みたる人なり故に其道業の人に絶することは敢て居士の言を竢たず之に加ふるに品行方正膽力強大なるを以てす將來に於ける本山貫首の候補者として毫も不可を見ざる所以師の嘗て化門を愛知に開くや其道譽故笠間龍跳師等と雖も高かりし今や對馬の國分寺に親篆し對馬探題を以て自任す抱負の大なること敢て言を要せず其能く宗門の邊疆を守り自任する處を全ふするに至りては何人か感謝を師に擧げざらんや

師天資綿密にして放縱を忌む故に日用の行持一として古轍に合せざるはなし邊疆の弊其對馬たり壹岐たり將た佐渡たり北海道たるを問はず往々放縱に流るゝを例とす而かも師が古道を信ずるの厚き方正自から持して配下寺院に臨む故に木強對馬寺院の如きを以ていして皆師を憚りて古道を行ふ對馬探題の英名早く既に中原に轟く所以嗚呼

師や實に一流の人傑なる哉

在田彦龍師（武藏國北豐島郡岩淵村鳳生寺住職）

小少より以て六十九歳の今日に至るまで太祖弘德圓明國師以外に宗祖あることを知らず太祖弘德圓明國師の兒孫以外に曹洞宗あることを知らず大本山總持寺以外に本山あることを知らず專心一意以て忠誠を大本山總持寺に盡す師の如きは實に大本山總持寺の歷史中に於て尤も光輝を放つものと謂つべし

若し師が總持寺に盡くし來りたる忠節を擧げんか百紙を涅し千筆を禿すと雖も到底擧げ盡くすべからざるなり故に居士は限りある紙幅に向ひて悉く之を擧ぐることを能はず已むなくんば其一二を擧げ以て師が總持寺に盡くしたる功勳の如何に偉大なりしかを證せん

嘗て幕政の衰頽に乘じ永平寺の總本山論を唱ふるや當時師は總持寺

に役者として大に其不可を論爭し死力を盡して之れと相戰ふ然れども永平寺既に官准を蒙ぶりて總本山と稱す之れと相戰ふ固より姑息の手段に依頼すべきにあらず於是乎京師に抵りて百方畫策す成らず此時に當りて中條二郎の女梅子なるもの仕へて九條家に在り師以爲らく永平寺總本山論の大勢を翻へす尋常一樣の手段を以て到底其目的を達すべきにあらず如かず婦人の勢力に訴へ裏面に就て之を達するの捷徑たらんにはと乃ち紹介を得て潛かに梅子に面し說くに永平寺總本山論の不可を以てし總持寺の爲めに一臂の力を假さんことを乞ふ梅子深く師の忠節に感激し必ず其目的を達せしめんとを矢ふ此間に於ける師の苦心筆紙の能く盡くす所にあらず幾もなふして總本山論永平寺の敗るゝ所と爲り而して師の志始めて茲に酬ゆることを得たり當時師にして婦人の勢力を利用するなからんか今日の總持寺

は、或は永平寺の配下に屬するの不幸を免れざりしならんか或は傳ふ
師の梅子を九條家に訪ふや俗服を以て身を粧ひ一刀を腰間に挾さみ
お高祖頭巾を頭に冠むりて宛然士人に打扮し一雙の鯉魚を携へて之
れに贈れりと俗裝を以て僧家の一大屈辱なりとし沙彌驅烏の輩と雖
も尚俗人に扮することを屑とせざる當時に於て師は總持寺役者の地
位を以て涙を飲みて士人に打扮し鯉魚を携へて梅子に贈る死生を總
持寺とゝもにするものにあらずんば何を以てか此の如きを得んや居
士常に石溯會同館の詩を愛誦す曰く萬里孤臣致命秋此身何止一溫浮
提携漢節同生死休問鄭羊解乳不と而して今師が當年に於ける苦節を
見る蘇武の苦節も何ぞ云ふに足らんや又傳ふ師の越前を過らんとす
るや總本山論に贊同するの輩師を途に要して之を刺さんとす師乃ち
駄荷に混じ馬背に在りて此難を免るゝことを得たりと古人云く死或

は泰山よりも重く或は鴻毛よりも輕しと乃ち師や能く死の輕重を知
るものと謂ふべし

今や師革新會に領袖として分離軍の總勢を指揮す分離派の勢力一時
宗門を風靡したる所以か

之を要するに總持寺に對する師の大勳偉蹟は青史なるものありて之
を百代に傳ふ固より居士の言を竢たざる所なり而して師や曾に總持
寺に對して元勳たるのみならず宗門に對して亦實に元老たり宗門の
麟閣豈に斯人を上せざるべけんや

安達達淳師（信濃國北安曇郡大町靈松寺住職）

安達達淳師も亦大本山總持寺大忠臣中の一人なり而して師が在田彦
龍師と同じからざる點は彦龍師に在りては隨緣的に忠節を盡し師に
在りては不變的に忠節を盡したるに在り故を以て其顯晦亦同じから

ず彦龍師に在りては本山に仕へ嘗て權中敎正の榮位に陞りたるに拘らず師は大講義を以て信山に蟠踞し有志會の革弊軍を擧ぐるに際し漸く信山を出でゝ重ねて喙を制度上に容るゝに至れり然れども師が總持寺に韲したる偉蹟に至りては決して彦龍師の下流に置くべからざるなり是れ師が總持寺の元動宗門の元老として彦龍師と一もに深く末派寺院の崇敬を受くる所以なり

師が天性の一轍なることは師が日常の擧動に就て之を證することを得べし嘗て總持寺監院として東都下谷池の端の出張所に在るや當時諸嶽總持寺貫首も亦出府して法嚢を出張所に駐めたり諸嶽貫首即ち故勅賜弘濟慈德禪師は風外和尙門下の人なり故を以て常に風外和尙の肖像を壁間に懸けて追慕の情を遣る師其肖像の袈裟に環總なきを以て居常意に滿たず以爲らく螢峩兩祖の兒孫は須らく兩祖の服を服

せざるべからずと一日諸嶽貫首師を召して茶を喫せしむ師固く辭し且つ侍者に謂つて云く山僧は螢峩兩祖の兒孫なり蓄生の服を服するものと一堂に坐すことを得ずと諸嶽貫首之を聞き明日筆を祇つて肖像の袈裟に環總を畫き師を召して茶を喫せしむ師乃ち快く其宝に入れりと云ふ其一轍なる始終此の如きものあり

明治の初年廢佛毀釋の論大に行はれ而して信州尤も其慘を極む師憤然として曰く我が頭以て斷つべし我が道遂に毀つべからずと乃ち死を決して蕃廳の暴令に抗し以て滔々たる廢佛の大勢を挽回す今日信州に佛法ある一に師の恩賚に依れり乃ち師や曾に總持寺に對し宗門に對して殊勳を樹てたるのみならず亦日本佛敎に對して實に偉大なる勳功を樹てたるものなり護法扶宗の赤誠天日を貫くものあるにあらずんば何を以てか此の如きを得んや

師年紀七十有二尙度生に倦まず妙明心源の大道を以て銳意俗流の佛法を改造せんと欲し嘗て妙明心源鈔一卷を著はす常に嘆じて云ふ餘命幾もなし吾れ夫れ遂に妙明心源を抱きて此土を去らざるを得ざるかと故を以て尙も師に就て道を問ふものわらば婦人小兒と雖も厚く遇して之れに敎ゆ之を佛祖の再來と云ふ誰か敢て誣言と云はんや

麻蒔舌溪師（三河國渥美郡大久保長興寺住職）

大洞院獨住第一世として嘗て道譽を宗門に轟かし大本山永平寺東京出張所監院として今や曹洞宗務局に良相たり謂ゆる出でゝは將入つゝては相なるもの居士麻蒔舌溪師に於て乎之を見る

師は風外和尙の法孫にして夙に說敎の名手を以て英谷を馳せたるものなり之に加ふるに宗乘餘乘の學に通じ而して慈悲心頗る深きを以てす故を以て遠近の道俗師を慕ふこと恰も慈父の如く悲母の如し師

既に此の如き歸仰を受けて三河に振り以て化を東海の各州に布く勢力の至大なること敢て先輩諸師に讓る所なき所以歟若し夫れ說敎の絕妙なる點に至つては當年の宮崎那尊者も亦師に對して多少の遜色なからざるを得ず一概に說敎に堪能なりと云へば眞宗に於ける談議僧なるものも亦說敎に堪能なり以て師を此尤も賤しむべき談議僧と一例に視るも可なるか否師が說敎に堪能なるは唯師が辭辯を用ひて大敎を宣說するの堪能なるに止まらず師が日用の行持一に其絕妙なる說敎と相須ちて毫も間然する所なきを以てなり行說一如是れ之を眞の說敎大家と謂ふ唯師のみ能く之れに契當す謂ゆる談議僧又は宗門に於ける談議僧的說敎名家の固より企て及ぶ所にあらざるなり

師天資溫厚篤實而して尤も門生に篤つし唯一癖莊嚴の善美を好むに在り然れども信なるもの或る場合に於て多くは韭嚴より喚起す乃ち

師の一癖甚だ尤むべからざるなり嗚呼風外和尚の法孫今日僅かに師一人を剰すのみ而かも師出でゝは將入つては相として深く末派寺院の望を負ふ果然瓜蔓茄子を生ぜず大寂定中風外和尚の微笑以て知るべきなり

青島興庵師（遠江國榛原郡勝坂口石雲院住職）

事理に明晰にして宗務に精通し坐談巧にして詩書を能くす我が青島興庵師の如きは武庫の兵衆ねざる所なき者非歟

師は天性短氣にして怒り易し是を以て往々人の感情を傷くるが如きことありと雖も而かも師は平然として恰も之を意に介せざるものゝ如し諸を彼の左顧右盼一意媚を献じて人の意を遊へ以て地位の安固を圖るものに比す固より日を同ふして語るべきにあらず

師久しく地方宗務の衝に當り又嘗て議案編制委員として曹洞宗務局

の樞機に參ず是れ宗務熟達の稱ある所以歟其事理に明晰にして能く秋毫の末を察し密も譎詐を容るゝいとなきは老高僧中罕れに見る所故を以て風波の宗海に湧くや師は必ず調停者の地位に立ち双方の間に往來し巧妙なる坐談を以て明晰なる事理を說く亦一流の高僧たるを失せず

師鋒鋩犀利一見犯すべからざるの概あり故を以て人皆師を畏敬す到底禪僧は禪僧たり

阿川斷泥師（信濃國松代長岡寺住職）

山陰山陽四國九州の道俗は且らく措く苟も籍を宗門に掛け少しく嘗年の事情に通ずる者誰か當年の少敎正瀧斷泥の名を記せざる者あらんや顧ふに斷泥敎正の嘗て防長二州に在るや維新の大變敎門に波及し敎門を漂蕩して殆んど底止する所を知らざらんとす此時に當りて

内頑僧の頑夢を提醒し外暴吏の暴政に抗し遂に廢佛毀釋の鋭鋒を鈍化し以て放門をして漂蕩の厄を免れしむ斷泥敎正の放門に於ける其功蓋し偉なり況んや之によりて曹洞の一宗派を防長二州に稱するに至りしをや勝敗は固より兵家尋常の茶飯なれば後來其勢力を用ゆる稍々過度に失し之が爲め一二兩號支局の分裂を促すに至りたりと雖も斷泥敎正の英名は之によりて毫も減ずる所なかりし尊で南遷して薩州の福昌寺を再興し石屋眞梁禪師の遺業をして再び九州に光被せしむ師半生の事業實に此二を以て最と爲す長人の智に薩人の膽を併せ有するものにあらずんば何を以てか此の如きを得んや宜なり奕長人、薩人共に師を推尊して益々歸依を加ふるや今や松代の長國寺に據り分離軍に客將として一臂を能本山に致す功名の志老て益々壯なるを見るべし然れども滝として滝としての前日の斷泥和尚を以て阿川として

今日の斷泥和尚に比す昨是か今非か今是か昨非か其間自から分あらん唯居士の俗眼遂に之を甄別する能はざるのみ

一擲千金總是膽家無四壁不知塞是れ謂ゆる博徒を敢ずるの詩用ひて以て師を品す固より不倫の譏を免るゝ能はずと雖も此の如きの膽力は今日尚依然として師の丹田に存せり況んや師の任俠決して幡隨院長兵衛唐犬權兵衛等の下に立たざるをや彼の學識の該博なるが如き詞藻の富麗なるが如き師に在りては抑も末のみ以て師を莊嚴するに足らざるなり

有澤香庵師（摂津國東成郡四高摂津村顯孝庵住職）

顯孝庵は鴻の池一族の香華院なり鴻の池即ち山中氏と云へば何人も三井氏と相並びて往古より日本第一の長者たるを知る故に大阪の人顯孝庵を知るものにして鴻の池一族を知らざるものなく鴻の池一族

を知るものにして顯孝庵を知らざるものなし有澤香庵師の今日大阪人士に推重せられ併せて英名を宗門に知らるゝは師が天稟の才氣人に絶するの致す所なりと雖も鴻の池一族の香華院たる顯孝庵に住職するの一事亦其助緣たらずんばあらざるなり

師が交際に巧妙にして理財に絶倫なることは殆んど其天性に出づるが如し人動もすれば則ち云ふ交際と云ひ理財と云ふ俗人の事のみ僧家の固より關する所にあらずと居士答へて云く然らず僧家の本分所心滅智若くは獨善自養に在るか交際固より用ゆる所なし理財何の交渉かあらん而かも僧家の天職は爲人にあり度生に在れば此目的を達するには時に理財の術を學びて布敎興學の事業を勃興せしめざるべからず時に紳士貴婦人の間に出入して和光同塵せざるべからず僧家にして苟も此活作用なからんか是れ死漠のみ固より敎門に寸益なき也と師既に天性此二術に巧妙なり是を以て森有禮氏の文部大臣となりて熱心に英學の勃興を懲悪するや師亦青年子第の耶蘇敎に化せらるゝを豫防するは大に英語學校を設け青年子弟をしてミツシヨンスクールに入らしめざるに在ることを悟り外熟練なる交際の手腕を以て鴻の池一族を始め中等以上の人士に贊同を求め內理財の要衝に當り明治二十年の春協立學校を大阪に興し內外幾多の學士を聘して盛んに英學を青年子第に授け而して特に佛敎を以て倫理を敎へ京都の同志社と相對峙して大に佛敎の氣焰を吐く交際と理財に巧妙なるにあらずんば何を以て此の如き一大事業を樹立することを得んや

師亦宗門革弊の志に切なり嘗て有志會の大阪に起る師實に之れが倡首の一人たり唯機を見るに敏なり故に其爲し得べき限りを爲して其餘を爲さず是を以て嘗て一回も敗を事業に取りたることなし亦一流

の俊才なる哉

阿部太環師（陸中國南岩手郡米内村源勝寺住職）

曹洞宗議會に會頭として嘗て萬丈の光焰を吐き末派總代委員の上席として今や曹洞宗務局の執政を監督す容貌愚なるが如く而して愚ならず天性才なきが如く而して才あり嗚呼是れ阿部太環師の阿部太環師たる所以歟

人に要する所のものは德望のみ苟も德望あらんか天下の事何ぞ意の如くならざるを憂ひん謂ゆる學なるもの識なるもの才なるもの智なるもの無きは固より有るに如かずと雖も若し德望の基礎を得ざらんか學識才智の四如何に人に絶するものありと雖も以て用ゆべき所なきなり

師果して如何なる伎倆を有するか居士未だ之を悉すことを得ず然れ

ども師が德望の學識才智を壓するものあるは居士慥かに之れを認め得たり師既に此德望を有す故を以て嘗て曹洞宗議會に於ては其會頭に推され議會の閉づるに及ぶや亦滿場議員の互撰を以て末派總代委員に撰出せられ上席を以て吉川、大溪、渡邊等の諸師を率ゐ其内屋見、服部の兩事務取扱を輔け外内務省に逼りて内訌の鎭定を求むるに至りては主務大臣果して之を容るゝや否やは居士等門外漢の得て知る所にあらず從つて其是非を判するに由なしと雖も之を要するに師も亦一種時勢に通ずる的の人而して德望を以て同僚を率ゐ末派總代委員の勢力非常に强大なる所以

足立普明師（丹波國河鹿郡以久田村高盛寺住職）

生死窮通附祿醜婦言雖好不須聽利名役々眞成醉只有先生是獨醒是れ清の汪紹焻が劉伯倫を詠ずるの詩に係る足立普明師の酒に於ける殆

んぞ劉伯倫の如きものあるか而かも五斗にして始めて醉ひ醉ふて宗門の曲事を罵倒す亦快丈夫の本色を失せず

師は谷垣省拙翁の法嗣にして久しく故能仁栢巖老師に侍し而して破邪顯正の衣鉢を繼承したる人なり故に栢巖老師の歿後人の破邪顯正の業に從ふものなきや護法の熱涙自から禁ずる能はず遡ひで一篇の大文字と爲る群鷄一鶴是れなり爾しより以來東奔西走破邪顯正の大義を唱道し或は演說に或は著書に一年三百六十五日一日として休すること無し著はす處群鷄一鶴を除きて尙足立普明意見書耶蘇教亡國論「天理教信ずるに足らず」等の諸書あり而して皆て「第一義」に主筆とし「如是」に主筆として尙政教問題を痛論し今や「如是」に主筆として政教問題の論究に從ふ其年紀を問へば僅かに三十四而かも其英名は早く既に宗門の四隣に達せり絶倫の天才を具ふるにあらずんば何を以てか此の如きを得ん

や

特に師が憂宗の志に至りては尋常僧家に比して居士は一層其深きを見る有志會の大阪に起る師も亦赴きて之れに會す其扶宗會々議を兼ねて東上するに及びて宗弊釐正の志益々堅し於是乎錫を東京に留めて艱苦備さに嘗む然れども其間一日も撓まず孜々釐正の事に從ひ頗る樹立する所多し唯酒を以て命と爲す故を以て人勸もすれば之を是非するものなきにあらずと雖も既に酒を喫して獨り醒む彼の酒を喫せずして悉く醉ふものに孰若れぞ快丈夫果して快丈夫の價を具せり

新井石禪師（越後國中蒲原郡澤海村大榮寺住職）

新井石禪師は故與國前住新井如禪老師の法嗣なり如禪老師嘗て綿密の家風を以て宗旨を東國に唱ふ東國の人老師を推尊して活如來と稱し老師の輪下に輻湊して安心立命す師其箕裘を繼承して綿密の家風

を守り遺業を保持して失墜せざらんことを矢ふ今や曹洞宗務局に在りて參事官的の職務を執り日夕宗務に執掌すと雖も其志は常に老師の遺業を保持し宗風を宣揚するに在り唯師が宗務に執掌する所以は乃ち師が宗門公共の義務を盡くす所以にして敢て自から求めて權勢の地位に立ちたるにあらずと云ふ夫れ或は然らんか之を要するに師は如禪老師の模型に投じて鑄出せられたるを以て平生の擧動一として如禪老師と相逼らざるはなし師にして若し聖胎を長養し徐ろに人間に下り來らば第二の活如來として東國人士の信仰を維持せんこと敢て難きにあらざるべし

師天性温厚にして忠良なり故を以て學問深博なりと雖も敢て人に驕らず乃ち人に驕らずと雖も師の學力は平生擧措の上に發動し人をして之れと接する益々久ふして益々師の學問該博なるに驚かしむ唯人

と爲り恭謙なり故に努めて十成を避け八成に居るを以て一見其人品を鑑識すること難し嗚呼是れ故如禪老師の法嗣たる所以歟乃ち師や實に前途多望なりと謂つべし

佐藤大忍師（播州國八部郡兵庫西柳原町福昌寺住職）

福昌寺は卽ち般若林なり般若林と云へば何人か覺栢二師の在世を追懷せざらんや蓋し般若林は嘗て故覺嚴老師の開闢して四來の學者を接得したる處而して故能仁栢嚴老師の箕裘を繼承し遺業を宣揚したる處故を以て當時の學者足般若林の閾に跨らざれば以て辱とし競ふて輪下に輻湊す是を以て般若林の名早く既に宗門の內外に轟き覺栢二師の道譽と丶もに人の視聽を聳へしめたる所以なり

師は覺栢二師の法統を繼承したるものなり故を以て少小より深く學問に淬勵し若冠專門本校を卒業して敎育の事業に從ひ故栢嚴老師化

を戢むるに迨び其遺囑を受けて福昌寺の法席を董し老師の遺業を繼承して日夕講苑を寺門に開き内四來の學者を接し外有緣の道俗を化す其全力を擧げて敎學の二途に盡し能く覺栢二師の遺業をして失墜せしめず二師の心を以て心とするにあらずんば安んぞ此の如きを得んや

師天資謹厚にして品行尤も方正なり故に兵神の地甚だ佛法に踈緣なるにもかゝはらず能く士女の歸仰を受けて宗門の尊嚴を保持す覺栢二師にして知るあらば大寂定中の歡喜以て知るべきなり

師又頗る敎育に熱心なり神戸の地外人居留地の區域頗る廣漠なるを以て恰も外人邦人と雜居するの感あり而して兵庫は一條の湊川を隔てゝ神戸と相接するのみならず神戸と同一市政の下に立ち利害を神戸と齊ふするを以て英語學校を設け檀信徒の青年子弟に英學を授く

るの必要を感じ嘗て般若林學校を設け外人を敎師に聘して檀信徒の青年子弟に敎へ又は曹洞宗大學林に學監として林生陶冶の任を盡くす其他敎育上に盡くす所の力頗る多しと云ふ亦覺栢二師の法孫に負かずと謂つべし

佐藤實英師（相模國足柄下郡早川村海藏寺住職）

師が幼時の閲歷を知るもの誰か飲泣嗚咽して其不遇を悲まざらんや嗚呼幼にして異鄕に淪落し備さに辛酸を嘗む不幸師の如きは實に悲むべきなり然れども艱難は幸福の母たり師幼時既に此の如き不幸の境遇を閲みし千辛萬苦を嘗め來りて漸く今日の好生涯に達せり頭を回らして往時を追懷すれば或は黯然たるものあらんか

師固より縱横の天才に乏し故に應用の點に於て或は同輩に及ばざるものあらんと雖も實力の點に於ては同輩固より師に遜色なきを得ず

師が嘗て專門本校に在るや宗學是れ耽り絕へて力を餘事に費せず故に宗學に於ては同窓中師常に其上位を占めたりと云ふ豊錦湘北に歸り一意育英の事業に從ふや名聲徐ろに四方に聞せ遂に故海藏寺祐老師の眷遇を受け其遺囑に依りて海藏寺に視篆するに至れり況や曩には東京中學林區の互撰に當りて同林に監理の職を奉じ今や神奈川縣第二號支局に取締として管内寺院を治むるをや蘇長公の謂ゆる梅は寒苦を經て清香を發する者居士師に於て平之を見る

師天資温厚篤實にして能く人を愛す故を以て其道譽湘南に嘖々たり唯師が縱横の天才に乏しきに拘らず動もすれば喙を宗門の時事に容る故に屢々令聞を傷くることを致す師たるもの宜しく既往に顧みて其短を短とすべきなり嗚呼師既に温厚篤實の君子にして宗學に通達す乃ち何ぞ其長を長として故前住老師の遺業を擴充し併せて其素願を達せんことを努めざる而かも其短を短とせず自から侮りて令聞を傷く居士師の令聞に對して切に之を惜み前住故義祐老師の遺囑に對して潜かに之を悲まざるを得ず前住老師にして知るあらば夫れ師を何とか謂はん然りと雖も今や師口を守りて瓶の如く復宗門の時事を語らずと聞く乃ち師の光輝此より燦然たるものあらんか居士偏へに此風說の眞說ならんことを望む

北野元峰師（東京市芝區芝愛宕町青松寺住職）

東京は皇居所在の地にして大日本帝國の首府なり明治二十五年十二月三十一日の調査に據るに人口を有すると實に百十八萬零五百六十九人皇族あり華族あり大臣あり大將あり學者縉紳より以て富商豪賈に至る一に全國の粹にあらざるはなし此間に在りて宗門布教の樞機を握り貴族縉紳の歸仰を受けて道譽を宗門の内外に聞す北野元峰師

の如きは實に明治の忠國師と謂つべき歟

政令の本源が東京に在ると同時に敎化の本源も亦東京に在り試みに之を時々の流行に徴するに東京先づ唱へて而して後地方之れに和す中央集權の餘弊未だ去らざるの致す處勢ひ實に然らざるを得ず故に其佛敎と耶蘇敎とに論なく苟も之を全國に播布せんと欲せば先づ本據を東京に定め而して後地方に及ぼさいるを得ず是を以て東京に於ける敎勢の盛衰は即ち全國に於ける敎勢の盛衰なり師の東京に據り て化門を開く實に地の利を得たるものと謂つべし

師既に地の利を得て大に化門を東京に開く苟も地の利を得ば則ち等常の碩德高僧を以てするも尙一國の敎勢を振興せしむることを得べし況んや碩德中の碩德高僧中の高僧を以て此大任に當るをや是れ宗門の紛擾連年熄まざるにも拘らず全國宗風の旺盛毫も昔日と相異ら

ざる所以歟

師宗學に於て猶得の妙を有す故を以て學者縉紳の雖一たび師の說法を聽聞せば幽玄の理高妙の談に感じ赤誠を傾けて之れに歸依せざるはなし況んや操行の高潔なる旌德能く一世に模範たるをや乃ち師の信者中貴族縉紳學者軍人の多き何ぞ怪むに足らんや

之を要するに師は實に宗門東京布敎の全權を握る者なり而して莊重の言辭を以て深遂の理を談ず尤も學士博士の歸仰を博する所以歟但師が嘗て管長代理として宗門に臨み今や紀綱寮司として三十萬圓の基本財產を管理するに拘らず此の如き俗務に於て甚だ巧妙ならざるは甚だ惜むべしと云ふ者ありと雖も是れ僧家の本事にあらざれば措も亦妨げず然りと雖も井上內務大臣が嘗て兩本山間の紛擾を和解せしめんとし兩本山の當路者を其官邸に招きて饗宴を張るに當り師が

中立派に傾袖たるを以て深く公平無私の人なりと信じ師を招きて其席に列せしめたるが如き以て師の人と爲り如何をトするに餘りあり師にして一日東京を去るあらんか東京の佛法は夫れ闇黒世界たらん明治の忠國師其任亦偉大なる哉

北山絶三師（美濃國不破郡今須村鈔應寺住職）

大本山永平寺前貫首瀧谷琢宗禪師に亞ぎて一時攻撃の焼點に立ちたるものは曹洞扶宗會幹事北山絶三師なりとす然れども攻撃なるものは固より尋常平々の凡漢と相干るものにあらざれば乃ち師が大本山永平寺前貫首瀧谷琢宗禪師に亞ぎて一時攻撃の焼點に立ちたる所以は實に師が尋常平々の凡漢にあらざることを立證する所以なり若し師をして尋常平々の凡漢たらしめん乎誰か師に向つて攻撃を加ふるものあらんや

師が攻撃の焼點に立ちたるは實に明治二十二年の交に在りとす而して何故に師が斯く攻撃の焼點に立ちたるかは門外漢たる居士の未だ悉すを得ざる所なりと雖も要するに師が大本山永平寺前貫首瀧谷琢宗禪師と密かに結托して曹洞扶宗會を設立し末派寺院を籠絡して大に私利を圖りたりと云ふに在るものゝ如し若し皮肉に穿鑿を遂げなば或は左る疑惑も生ずべしと雖も曹洞扶宗會の目的たる本來曹洞宗教の擴張を期するに在ることは同會設立の趣意が公衆に告白する處にして而して之れに加入したる一萬有餘の末派寺院も之を善美の事業否自己に利益なる事業として加入したることは敢て疑ふべきにあらず唯新宗制に於て嚴重なる住職試驗の制を設けたると同時に曹洞扶宗會なるもの起り同會に會員たる寺院の爲め管長に稟申して住職試驗を免除せしむる方針を執りたるに據り思ひ懸なくも此奇禍を買

ふに至りしならんか之を要するに攻撃の多少は其人の眞價と相伴ふものなれば乃ち師が一時攻撃の焼點に立ちたる所以は實に師の眞價の尋常一樣にわらざるを證明するものと謂ふも不可なし

師天資綿密にして陳策に流れず故を以て其長處は事業の設計に在り且つ江湖新聞既に倒れ曹洞扶宗會亦往時の盛を見る能はずと雖も而かも師が宗門に對する勢力は尙依然として昔日と異るなし憶ふ當て師が權少敎正を以て大阪府第一號支局に取締たるや時恰も明治十一二年の交に在りしを以て權少敎正の威風は實に非常の勢力と非常の崇敬とを有したりき人爵崇拜の風漸く薄らぎたるを以て此の如き快境遇は今日復見るべからずと雖も師が宗門に對する勢力に至りては寧ろ權少敎正たりし時代に加ふるものあり唯高才往々鬼神に忌まるる則ち師の常に奇厄に遭遇する所以歟林末に秀づるの木は常に風の擢

く所となる社會の通則たり師たるもの豈に常に注意を怠るべけんや

北野吾有師（和泉國泉郡信太村陸涼寺住職）

「聞かせはや信太の森のふる寺に小夜ふけわたる雪のひゝきを」と是れ豈に濟北の古英雄神機獨妙禪師（即ち有名なる白隱和尙）が蔭涼寺に於ける投機の一句子なるにあらずや臨濟今日の佛法は全く源を蔭涼寺に發し正受老人を經て而して舟楫にあらざれば以て渡る能はざるの偉觀を成したるものなり乃ち蔭涼寺なるものは實に宗門名譽の一道場たるや疑なし

師は故興聖退吾老師の令嗣にして而して放見性奇雲老師の令弟なり故を以て家訓を遵守し少小より打坐の王三昧に住す其聞達を求めず利祿を貪らず專心一意先師の遺業を皇張し夙夜失墜なからんことを願念するに至りては天桂一派の老宿中罕れに見る所是れ師が宗門名

譽の道場に視察して歴世諸禪師の遺業を保持するに堪へたる所以なり

師天資温順尤も門下の雲衲を憐む今や大阪府第二號支局に取締として接衆の餘暇地方宗務を視るといへども其志區々俗事の上に在らず自是實金屋裏人、眼高見不到黄金、名門の子弟其眼高しと謂つべし

木田韜光師（美濃國不破郡岩手村禪鎧寺住職）

其學問は深遂其言辭は爽快其膽力は放大にして嘗て專門本校出身者中の尤物と稱せられ今や大本山永平寺東京出張所副監院の顯職に在りて宗務の要衝に當る木田韜光師の如きは實に宗門有數の俊傑と謂つべき歟

蛇は三寸にして既に牛を呑むの氣あり果して眞乎乃ち師の如きは少小にして既に俊傑たる氣魄を具ふるものと謂つべし維新の前後に當り長藩の議論分裂して俗論正義の二派を生ずるや師は十四にして從軍し正義派に投じて大に鯖山嶺に戰ふ此氣魄を窺らして佛門に投じ辛參苦修功を積み德を累ぬ其專門本校出身者中の尤物として同窓の畏敬を受け遂に徹されて今日の顯職に陞る居士固より偶然にあらざるを知る

有志會の大阪に勃興する以前に於て師は果して如何なる地位に立ちしか居士は之を知らず、然れども師が不平黨の一人として本覺寺の鹿ヶ谷に會し宇野默音師と云へる俊寛僧都と相謀りて有志會發動の主機となりたることは居士一人の想像に過ぎずと雖も之を實際に徵するに居士の言を以て悉く不是なりと謂ふことを得ざるものあり兎に角本覺寺の鹿ヶ谷會議に於て師が藤原成經的の地位に在りしことは居士の想像に於て甚だ過ぎざることを信ず

或者師を評して曰く師は宗門の後藤伯なり有志會を踏臺として遂に曹洞宗務局副執事の顯職を贏ち得たればなりと又曰く宗門の野心家富むもの師に過ぎたるはなからんと説の可否眞僞は居士保證の限りにあらずと雖も要するに師に一點の野心なしと思ふは少しく買冠りたる過と云はざるを得ず夫れ財を奪ふものは盜たり國を奪ふものは簒たると齊しく野心大なるものの佛たり野心小なるものは凡夫たり居士は師の佛たらんことを望む盜たり凡夫たることを望むや固より冀はざる所なり

師常に宗門の時弊を憂ひ潛かに之を更革するの志あり曾て弘津說三師、齋藤運三氏等と相謀り栴檀社を設立し東洋宗教新聞を發行す而も時利あらずして遂に雖不逝矣の不幸に遇ひ是を以て有志會を組織し面目を一新して重ねて宗弊の釐革を唱ふ而して其不撓不屈の精神は以て師が宗門有數の俊傑たることを證して餘りあり師たるもの益々奮はざるべけんや

菊池大仙師（陸前國柴田郡大河原町繁昌院住職）

奥羽六縣下に於ける曹洞宗の大立物として英名東北に隱れなきものは東北聯合佛教會々長菊池大仙師其人なり

有志會の大阪に起るや關西地方を席卷して意氣頗る驕れりと雖も東北人心の向背未だ定まらざるを以て潛に深憂と爲す此時に當りて師は有志會の目的を奥羽六縣下に馳せ有志寺院を促して其運動を助けしむ有志會事に依りて解散し同盟會起りて其精神を繼承するに迨び師は奥羽六縣下の同志を率ひて之れに投じ地方勢力の糾合に淬勵す其所管に係る「東北之燈」に於て時弊を痛論するや眞個一字一涙讀去つて激奮せざるものはなかりき至誠鬼神を動かすものある

におらずんば何を以てか此の如きを得んや

明治二十五年三月十九日畔上總持寺貫首の能本山分離を宣言するや師亦上京して其事業を翼賛し先輩諸師を輔けて運動す其井上内務大臣に上りて裁斷を求むるの書を讀む陸離たる光彩發して人を射るか如し疑はる雨本山分離の可否は居士等門外漢の固より知る所にあらず從つて其結果果して如何なる點に歸するや否やを知らずと雖も之を要するに師が主義の爲めに盡瘁して倦まず身命財を抛ちて能本山の戰士たることを期す亦一個の俊傑たることを滅ぜず

木下吟龍師（東京市淺草區橋場町總泉寺住職）

栢巖門下の一秀才として夙に才名を當時の雲衲社會に馳せ栢巖老師の歿後福昌寺を去つて曹洞宗大學林に入學し三年の苦學を盤窓雪案に積み遂に甲科を得て同林を卒業す木下吟龍師の如きは實に宗門異數の秀才と謂つべき歟

橋場の總泉寺は愛岩下の青松寺、駒込の吉祥寺と相駢びて往時江府の三刹と稱す徳川氏の大政を奉還するや宗門の制度亦百事更新し江府三刹の權威從つて消滅に歸したりと雖も精神上に存する權威は今尚古へと異らず師不惑に及ばざる年齢を以て之れに住山し宵に總泉寺の威嚴を傷けざるのみならず他の二刹の主即ち北野元峰、三井海雲の二師と鼎立して相下らず天稟の才氣人に絶するものあるにあらずんば何を以てか此の如きを得んや

師眉目清秀容止都雅一見貴族的の風采を帶ぶ而して尤も講義に巧なり栢巖門下の一秀才として夙に才名を馳せたる所以歟

三井海雲師（東京市本郷區駒込吉祥寺住職）

學問の豐富以て稱するに足らざるなり德行の完全亦以て稱するに足

らざるなり唯其人公共の義心に富む於是乎學問の豐富以て稱するに足るべく德行の完全亦以て稱するに足るべし而して居士の特に三非海雲師に取る所以は學問德行の分子にあらずして學問德行の總躰たる公共の義心に在り

居士不幸にして未だ親しく師の學歷を聞くことを得ず且つ不幸にして親しく師の左右に侍したることなきを以て師の學問德行に於ては一も知る所なし從つて妄りに月旦することを得ずと雖も師が公共の義心に富むの一事は何人も嘖々賞讃して措かざる所なり抑も吉祥寺は宗門の昇平發とも謂つべき栴檀林學寮俗に謂ゆる駒込の學寮所在の地にして往古より以來名師巨匠遞代此處に住し全國宗門の秀才を集めて諸學の蘊奥を授けたる處幕末の騷擾と丶もに一たび講筵を閉づるに迨びて恰も天下の氣運茲に一變するに逢ひ專門本校の開設と丶もに遂に學寮を閉鎖するの已むなきに至れり尋で專門本校を麻布區日ヶ窪街に移し名を曹洞宗大學林と命ずるに至りて誦讀の聲全く吉祥寺に絶ゆ師大に之を慨嘆し私貲を拋ちて栴檀林を再興し宗門の龍象を集め專門の學者を聘して之に敎授せしめたりと雖も氣運の未だ到らざる遂に復之を閉ぢざるべからざるの不幸に遭遇せり於是乎名を栴檀學校と改め組織を一變して道俗に普通學を授く而して一切の經費皆師の一肩に負擔する所なりと云ふ有志會の革弊軍を大阪に起すや師亦深く其目的に贊同し寺門を貸與して其本部に宛てしむ凡そ此の如きの義擧實に枚擧に遑あらず師が公共の義心に富める何ぞ其至大なる

師豪膽人に絶す故を以て不法の命令ならんには政府之を下すと雖も拒んで服從せず是れ屢々曹洞宗務局の命令に對して服從せざりし所

以か乃ち師や實に老高僧中の一豪傑たり

水島洞仙師

師は大本山永平寺前貫首瀧谷琢宗禪師幕賓中の尤物なり禪師の嘗て宗門に管長として宗務を總攬するや師は徴されて副執事の顯職に立ち執事伊藤雲宗師と倶に禪師を輔弼して庶政を執行す禪師の越本山を勇退し森田悟由禪師代つて越本山貫首の寶位を踵すに及び師は副執事の顯職を辭し閑地に逍遙して爾來復喙を宗務に容れず今や兩本山間の紛擾方に閑なり借問す師が此際に處する心事如何を師既に多情多恨の人たり顧ふに此際に處して豈に一掬憂宗の熱涙なきを得んや

瀧谷內閣は兎角に攻撃多き內閣なりき攻撃の原因が果して瀧谷管長の失政に在りしか將た攻撃者其人の私怨に出でしかは居士等門外漢

の窺ひ知る處にあらずと雖も要するに攻撃の甚だ多かりしことは事實なり有志會の大阪に起りしは此際なり而して能本山分離の胚胎も亦此際に在りしやに風說す聰明瀧谷禪師の如き管長上に在り敏腕師等の如き執事之を輔弼して而して尙攻撃の甚だ多かりしと此の如し居士は實に其理由を知るに苦しむ然れども此間に處して優に宗務を執り毫末も宗門の進歩を停滯せしめたることなきは居士の特に師及師の僚友諸師に感謝を擧げて已まざる所なり熟棟の妙一に茲に至る彼の一攻撃に逢へば忽ち擧措を失して狼狽出づる所を知らざるの輩と逈然其撰を異にする所以なり

師年齒僅かに不惑を過ぐ而かも閑地に逍遙して功名に意なきが如し嗚呼眞に功名に意なきか居士俄かに之を信ずることを能はず

三輪泰然師（山雲國龍義郡山佐村妙樂寺住職）

不立文字教外別傳の意味一たび狹隘なる禪者により て誤解せられしより性相法相等の學を修むるものを罵りて心外求法の痴漢と爲し其玄理を談ずれば教者發智と冷評せられ其書を繙けば青表紙に心を奪はるゝと嘲けられ佛法的々の大意を七尺單前に禁錮して敢て歩を僧堂以外に移さしめず此の如き師家によりて薫陶せらる禪天魔の稱因つて起らざるを得ず

師は專門本校出身の學士なり夙に禪教衝突の弊害を痛慨し久しく西都に留學して餘乘の蘊底を盡くす故を以て天台、華嚴、俱舍、唯識の學一として精通せざるはなし宗門の餘乘學者として雷名遠邇に振ふ所以師性行頗る穩秀にして寛容なり故に曹洞宗大學林教授の榮職に徵されて林生に教ふるや學ぶ所を傾注して之を導き諄々として倦むなし而して尤も後進の士を愛す今や教授の榮職を抛ち故山に歸臥して布

教是れ努む布教の事宗門に於て固より急務たらざるにあらずと雖も師が其長を長とせず以て育英の事業を一擲し復省みざるに至つては居士如何ぞ宗門教育の爲めに惜まざるを得んや師以て如何と爲すか

水野良英師（伊勢國飯高郡松坂町養泉寺住職）

曹洞宗大學林卒業の學士にして或は教育に從事するものあり或は布教に從事するものあり或は更に幽邃の玄理を探尋して三藏を西都に學ぶものあり或は教育に資せんと欲して各種の科學を修むるものあり或は布教に資せんと欲して英佛の語學を修むるものあり而かも是れ皆圓內に在りて圖內の事を爲すに過ぎざるのみ若し夫れ海外觀光の大志を發して萬里の鯨濤を蹴り同胞を布哇に訪ひ宗教を米洲に視察し以て異日海外布教の準備を爲すものに至りては大學林出身者六百有餘名の中唯水野良英師一人あるのみ

師の初め朝比奈泰梧師と、ゝもに布哇に航するや其目的留りて在留同胞を教化せんとするに在りし然れども事情之を許さゝるものありて當初の目的を達することを得ず於是乎其計畫を一變し米洲に向つて宗教の事情を視察す抱負の大人に絶するものあるにあらずんば何を以てか此の如きを得んや

師の海外觀光を了し歸りて旅裝を故山に解くや曹洞宗務局は師を徴して大學林學監に任じ老練の手腕を以て學政を執らしむ今や任滿ちて故山に歸り一意布教の天職に從ふ五更の殘夢顧ふに歐山米水の間に飛ぶものあらんか居士刮目して師が海外布教の實行を竢つ

（尾張國名古屋市南小川町長全寺住職）

水野道秀師

布教は僧家の天職のみ苟も自未得度先度他の大願を發し細門に投じて比丘たるもの誰か布教の天職を有せざらんや而かも實際に於て之を行ふもの極めて少なきは何ぞ豈に之を口に說くは易く之を身に行ふは難きが爲めならずや今の鬚髮を剃除して比丘たるもの明治二十五年十二月三十一日の調査に據るに管長、教師、非教師、生徒を合して實に十萬七千六百十五人の多きに達せり之を管長、教師、非教師、生徒の四種に分てば管長に在つては實に三十七人教師に在つては實に五萬三千五百四十九人非教師に在つては實に四萬四千八百八十四人生徒に在つては實に九千百四十五人あり豈に驚くべき多數にあらずや此の如き多數の僧徒を有して而して布教の實擧らずと云はゞ知らず其實何人に歸すべきや布教の事之を身に行ふの難きは知者を待つて知るべきにあらず唯夫れ布教は僧家の天職のみ難易何ぞ問ふ所ならんや水野道秀師の布教に於ける其鞠躬盡瘁實に驚くべきものあり而して其方法たる敢て新意を出さずと雖も亦決して舊習に泥まず要唯進歩

の社會に對して相駢びて斯民を化するに在るのみ故に嘗て市内の有志者と相謀りて愛知佛教會を創設し尋で其機關として毎週一回能仁新報を發行す然り而して其目的總て文明的方法を以て大教を進歩の社會に注入するにあらざるはなし師今や愛知佛教會に幹事として布教の要衝に當り又能仁新報に記者として天下に於ける佛徒社會の耳目に任じ朝に大教を宣説し夕に教制を論議す十萬の比丘知らず師に對して慚死する所なきや否や

師年齢三十八九演説に巧みに英學を能くす亦宗門の一名士なり

水野禪法師（羽後國四田川郡四郷村善寶寺住職）

温厚なる其道貌都雅なる其風采一見人をして崇敬の念を起さしむ水野禪法師の如きは實に緇林の君子なりと謂つべき歟

大山の善寶寺は三河の妙嚴寺、遠江の可睡齋、相模の最乘寺等といもに宗門第一流の肉山と稱せられ其富饒なること宗内一萬四千の寺院中能く及ぶものあるなし而かも師は倹徳を以て寺門を治め日夕新願の餘力を以て布教の事に從ふ而して尤も公共の義心に富み内は宗門より外は國家に至る苟も盡くすべき義務に逢へば必ず進んで盡さゝるはなし緇林の君子として常に世人の崇敬を受くる所以か

兼中會の東京に起るや師は實に推されて其副會長たり尋で大本山永平寺後董貫首の撰擧に臨み師は親しく上京して部下の會員を指揮し大に同盟會と戰ふ後畔上能本山貫首の能本山分離を宣表するに及び直末の故を以て之れに贊同す今や山形縣第三號支局に取締として所轄寺院を治め公共の義心に報ちて地方宗務の要衝に當る然り而して所轄寺院の師を信任し毫末も師の施政に不滿を抱くものなきは師が特殊の伎倆之をして然らしむるは勿論なりと雖も亦必ずや其徳望の隆

なるに由らずんばあらず之を緇林の君子と謂ふ誰か其不可を唱へんや

紫安石雲師（但馬國城崎郡豐岡町養源寺住職）

居士嘗て放翁の醉歌を讀む曰く百騎河灘獵盛秋至今血漬短貂裘誰知老臥江湖上猶枕當年虎髑髏と師が今日の感蓋し亦此の如きものあらんか

師は膽力を以て勝つものなり故に師を知るものは何人も師を以て豪膽の偉物と爲さゞるはなし憶ふ明治の初年師は二三の士人と約して支那に遊び燕京に留まること月餘轉じて東北に出で山海關を經長白山の南麓を繞り鴨綠江を渡り陸路徒歩して高麗に入る其道途の危險兇賊の横行今日尚戒めて過ぐることを欲せざる處而かも師は明治の初年二三の士人とゝもに健脚之を通過し途中多少の危難に遭遇した

るも敢て意に介せず其膽力人に絶するものあるにあらずんば何を以てか此の如きを得んや今の天下の雲衲を以て自負し諸叢林を蹂躙して半可的師家を窘迫するにも拘らず海外を以て恰も幽明途を異にするものゝ如く思ひ一歩をも閫外に進むる能はざるもの以て慚死する處なきや否況んや其下流に立つものをや

師今や兵庫縣第三號支局に取締として宗門良二千石の名ありと雖も區々一地方の宗務に任ずるは固より其意にあらず然りと雖も風雲未だ際會せず故を以て未だ垂天の翼を張らざるなり謂ゆる老驥櫪に伏す志千里に在り烈士暮年壯心衰へざる者非耶早熟早衰の國民俄かに「グラッドーストーン」翁の八十餘歳の高齢を以て尚英國の政界に雄飛するを學ぶべからずと雖も五十にして遲暮を嘆ず亦甚だ大早計に失せりと謂はざるべからず宗門の事此より爲すべき也教門の事此より

爲すべき也山陰の偉物希くは自愛して風雲際會の時節を待て

日置默仙師（遠江國周智郡久努村可睡齋住職）

戒行高潔、定力牢固、慧眼明朗にして而して德風一世に高き者宗門果して幾人ある乎我が可睡現董日置默仙師の如きは實に宗門有數の高僧なるのみならず亦實に日本佛敎徒の粹なるものなり

師が畢生の大目的は禪定を勃興し宗風を擧揚するに在り故に二十七歲の若齡を以て始めて圓通寺の巨刹に視篆するや首として龍蟠を開き大に四來の龍象を陶冶し以て今日に至るも休廢せず其二十年一日の如く滿腔の熱血を禪定の勃興に傾注し狂瀾を既倒に挽回するに至つては誰か師の古道に篤きを感せざらんや抑も宗門現今の弊は禪を去つて學に趨り行を舍てゝ解に就くに在り是を以て古道影を斂め宗風迹を拂ふ而して宗門精神の衰弱復醫すべからざるに至る幸に師の

古道に篤く佛祖に忠なるあり深く宗門精神の醫治は禪定を勃興するに在ることを信じ二十年一日の如く門下の龍象を提撕して只管打座の王三昧に住せしむ彼の嘗て鼎立學林を永澤寺の山內に設け又は聯芳學林を神戶に開き文字を以て青年子弟を敎育したるが如きは敢て青年子弟をして舌頭佛法を簸弄せしむるが爲めにあらず其志禪に入るものをして先づ普通の學術を修めしむるに在りき故に同林を出づるもの皆師の輪下に來りて入室參禪せり法幢可睡に移るに及び門下の尤物上田祥山師を擧げて後堂に住し一意接衆の事に當らしめ明年を期して將さに僧堂を山內に設けんとす爲宗爲法の衷情熱して火の如きものあるにあらずんば何を以てか此の如きを得んや

師今や宗門の大事に關して東奔西走維れ日も足らず而かも人に逢へば必ず道を論じ古人淸訛の因緣を說く故に人皆赤心を推して師に歸

依せざるはなし德風の一世に高き固より偶然にあらざるなり足立普明師嘗て師の法幢を萬松山可睡齋に移さるゝを賀するの伽陀あり無慮五百六十言曲さに師の平生を盡して餘す所なし乃ち左に錄して居士が禿筆の及ばざる所を補ふ

一鉢隨緣二十年。金錫又卓蓮峰巔。蓮峰風物何快絕。千山萬山落吟邊。」

憶曾穆公在此裏。坐斷要津執牛耳。雲兄水弟來叩門。法筵旺盛無可比。」

其奈知音太難逢。求之不得恨縈胸。展轉反側寐不寐。一逢默公夢始濃。」

意氣相投如膠漆。同生同死情益密。二人齊志利斷金。從此共講濟世術。」

濟世之要在自規。回首宗門亂如絲。大道陵遲非一日。綱紀頹敗殆幾時。」

公道唯悲有白髮。雄心雖勃奈易竭。乃將壯圖付默公。自向迷津任舟筏。」

默公少小抱深憂。十年默々養好謀。穆公壯圖公所贊。乃代穆公出七丘。」

或會南攝或東武。或嘗千辛或萬苦。義兵進擊老妖僧。風雨晦冥電如斧。」

凱歌湧處和氣催。忽見餘燼再燃來。怪霧又鎖不老閣。岌々危哉紫雲臺。」

由來越能無軒輊。只緣妖僧蓄異志。好揮快刀截亂麻。不忍萬世遺醜累。」

從此日夜碎鐵肝。臥薪嘗膽心不安。毀譽紛々何遑顧。只合一舉靖大難。」

恰逢能山唱獨立。八千貔貅如雲集。乃跨金鞍麾遊軍。義旗所向一當十。」

愁然日月失光明。壯圖垂成尚未成。雖乃未成將何恨。尚有殊勳堪細評。」

憶公昔日在吳北。橘仙門下學沈默。凡耶聖耶無人知。嘲云彼僧似槃特。」

一朝忽悟百事非。去向天德叩禪扉。禪扉有主眼如電。相見一笑破愁圍。」

朝參暮請不曾懈。兀坐終日甚矣憊。狂狗迫牆途既窮。退步始了行脚債。」

中興承統據草廬。此時恰逢維新初。排佛之徒彼何物。直闢邪說馳道譽。」

七丘山靈待公久。公縱無意寧可負。乃出中奧來圓通。中原始聞獅子吼。」

出則濟世入匡徒。不怪門下多鳳雛。或開學庠或叢社。如此殊勳不可誣。」

今日蓮峰迎金錫。萬松逢春翠欲滴。三尺靈神六尺人。要見相携奏丕績。」

弘津說三師（周防國玖珂郡横山村洞泉寺住職）

其年齡を問へば僅かに三十三四而かも大本山永平寺に副監院として宗門樞要の地位に立ち貫首森田悟由禪師を輔弼して滿腹の經綸を行ふ我が弘津說三師の如きは少壯高僧中實に第一位を占むるものと謂つべき歟

大學林を卒業し本山僧堂の安居を了畢し碩德を以て宗門に重んぜらるゝもの何ぞ限らん此間に立ちて第一流の名を博し一躍して直ちに宗門樞要の地位に陞る人に絕するの伎倆を有し深く宗門上下の望を負ふものにあらずんば安んぞ此の如きを得んや

師は舊姓を平尾と稱し少小にして才名あり漢學を岩國の鴻儒東崇一氏に學び宗學を曹洞宗大學林に修む大學林を卒業するに迨び深く宗門の時事に感ずる所あり於是乎木田韜光、兒島碩鳳、齋藤運三等の諸師と共に梅檀社を東京に設立し東洋宗教新聞を發行して萬丈の光焰を吐く師徹兵令を極論して不幸成法誹謗の罪に問はれ獄中に禁錮せらるゝに至りしと雖も師の英名は之れによりて益々四方に馳せ三尺の雛僧と雖も平尾說三の英名を知らざるものなきに至れり直言奇禍を買ひ奇禍却つて其人の剛直を證明す人間萬事恰も塞翁の馬に似たり

有志會の大阪に起る居士は未だ師が果して其會員の一人たりしや否やを悉さず然れども師が北野元峰師と共に管長と有志會との間に奔走し穩當の手段を以て有志會の目的を貫徹せしめ有志會に解散を促したるが如き早く既に其手腕の尋常ならざるを證せり而して身此殊勳に依りて遂に副執事の顯職に任せらるゝに至る骸骨を乞ふて直ちに故山に歸臥するに至りたりと雖も師が

宗門上下の信任を博すること此の如し今日宗門の大事に臨み徴されて再び樞要の顯職に就く亦怪しむに足らざるなり

師天資豪邁不羈大事に臨みて敢て驚かず而して尤も宗門の時務に通じ文章を能くす少壯高僧中に在りて第一位を占むる所以か

樋口道義師（羽後國南秋田郡上旭川村補陀寺住職）

忠諫の容れられざるを嘆きて岩倉の山莊に遁れ「住すつる跡を浮世の人問はゝ嵐や庭の松と答へん」の一首を遺して又岩倉の山莊を遁れ終に之く所を知らざる萬里小路藤原藤房卿を以て臨濟宗大本山妙心寺第二世授翁宗弼禪師にあらずと爲し幾多の證憑を擧げ來りて藤房卿を補陀寺開山なりと斷定し大に敎門歷史の認を匡さんとするものを誰とか爲す補陀寺現董樋口道義師其人なり此一事を以て直に師を敎門の歷史に精通するものと斷定するは頗る早計に失すと雖も然れど

も十年一日の如く其考證に苦心し授翁宗弼禪師を以て藤房卿にあらざることを公衆に發表するに至りては居士は師が史眼の炬の如きに驚かざるを得ず

藤原藤房卿が授翁宗弼禪師たると否とは外面より見れば宗門に何等の交涉なきものゝ如し故に世の近眼者流は師を以て恰も補陀寺の爲めに藤房卿の詮議を爲すものゝ如く思料するものなきにあらずと雖も是れ大に師の心事を知らざるものなり虎關師棟の元亨釋書を著はすは藤房卿出家の前後に在り而かも其書に於て曹洞宗を評するの言は如何元亨釋書が臨濟の一宗に偏倚して眞正の史證を欠くことは具眼の常に辯ずる處殊に曹洞宗を傳するに當り之を儘々一片紙に止めしが如き以て其公平を失するを證すべきなり抑も藤原藤房卿は頂門に一隻眼を具するの士なり卿にして果して授翁宗弼禪師ならんか則

ち已む苟も補陀寺開山其人なきには當時に於ける宗門の旺盛は特に喋々を待ちて後知らざるなり何となれば卿既に一隻眼を具す乃ち眞個の善知識を探りて其門に投ずるや固より言を竢たざればなり而して宗門五百年來の寃於是乎全然雪ぐことを得ん乃ち師は實に宗門の忠臣なり之を以て單に補陀寺の忠臣と爲すは酷なり

師年紀漸く而立を過ぐ而して常恒會格なる補陀寺に住し秋田縣支局に取締として宗門の地方長官たり而かも公餘を以て藤原藤房卿の考證に苦心し殆んど全勝を妙心寺の持說に占めんとす羽北の野人物あり謂つべし

須和文孝師（因幡國氣多部今市村讃傳寺住職）

師は宗門の星亨なり風采の堂々たる處相似たり學問の該博なる處相似たり事物に對し一點の拔目なき處相似たり一家の見識を立てゝ人に下らざる處相似たり而して特に其傲岸なるに至つては孰れか伯孰れか仲局外人の容易に甄別し能はざる處なり

意氣相投じ肝膽相照すは燕趙悲歌の士の由つて交を訂したる所以而して師又山本天桂師に對し意氣相投じ肝膽相照すを以て弟子の禮を執りたるものなり後東遊して故山本義祐老師に湘南の海藏寺に參じ尋で專門本校の自費寮に學ぶや而して其志蘆名を舍てゝ實力を取るに在るを以て身に專門本校卒業生又は碩德等の名稱を有せずと雖も實際の學力に至りては少壯高僧中肩を師に比するもの少し師の寺門を抛ちて西都に學ぶや法相性相の學を泉山の佐伯旭雅僧正に問ひ頗る造詣する處あり今や山本天桂師の後席を董して讓傳寺に主たりと雖も尙孜々乾々として學を廢せず唯傲岸人に下ることを欲せず故に交遊極めて少し是れ師に於て白璧の微瑕たらんか然れども媚を献じて